

あさりい万葉に
求食さかきたる
字の意にて食料
を求むるをいふ

人ごとの人のい
ふ言葉にいふ二
句一本たのみか
たさにさあり

心のくまハ心中
の隠れたる隈を
いふ
長濱は伊勢の名
所なり

のしりければ歸りまかりてつかひしける
あさりする時ぞ佗しき人忘れずなはの浦にすまふ我身の
公頼朝臣今まかりける女の許にのみまかりければ

寛湛法師母

あがめつゝ人まつ霽のよぶこ鳥いづ方へとか行かへるらん
忍びたる人に

讀人 玄らす

人ごとの頼み難さハ難波ある芦のうら葉のうらみつべしあ
忍びて通ひ侍りける人今歸りてあどたのため置ておやや
けの使に伊勢の國にまかりて歸りまできて後久しうと
はず侍りければ

少將 内侍

人はかる心のくまハきたあくてきよき渚をいかですぎけん
かへし

兼輔 朝臣

誰ためにわれが命をあが濱のうらに宿りをあつゝかひし

瀬もこそハみれ
一本瀬をもこそ
見れさあり

いひ出しては達
てみつからひ
たるにてはなく
人つてにては
せたるあり

今は早の歌大輔
さいふハ居る人
さ仕へ五月頃
にて四五月頃
わくりし歌なる
へしと新抄にあ

女の許につかひしける

讀人 玄らす

せきもあへず淵にぞ迷ふ涙川渡るてふ瀬を去るよしもがあ
かへし

ふちあがら人かよハさし涙川にたらハ淺き瀬もこそハみれ
常にまうできて物あどいふ人の今ハあまうでこそ人も
うたていふなりといひ出して侍りければ

きて歸る名をのみぞたつから衣あたゆふひもの心とけねハ
左大臣河原にいであひて侍りければ

内侍 平子

たえぬともあに思ひけん涙川あがれあふ瀬もありける物を
大輔につかひしける

左大臣

今ハはやみ山を出てやとゝぎすけちかき聲を我にきかせよ
かへし

ありて玄ぬべしといへりければ遣ひしける

朝忠 朝臣

諸共にいざといひすの玄での山越^こともこそん物あらさくに
年をへてかたらふ人のつれさくのみ侍りければ移るひ
たる菊につけて遣ひしける

清蔭 朝臣

菊の花の日に云々
てかく深き色に
成り如く我志
も年月を君も
又此花の名の如
く我ふこそを
く入るいさ云て
隠れよかしこ也

かくばかり深きいろにも移るふを猶君さくの花といひさん
人の許にまかりたりけるに門よりのみ返しけるにから
うじて簾のもとに呼よせてかうてさへや心ゆかぬとい
ひ出したりければ

讀人 玄らさ

みちくるは沙の
満来るに道來る
をみちくる空も
みちくる空も

いさやまだ人の心も玄ら露のおくにもとにも袖のみぞひづ
人のもとにまかりけるをあのでのみかへし侍りければ
道よりいひつかひしける
よる沙のみちくる浦もおもやえず逢事あみに返ると思へば

人を思ひかけていひわたり侍りけるをまちどやにのみ
侍りければ

多くの月一本多
く月日さあり

數あらぬ身の山の端にあらぬとも多くの月をすぐしつる哉
久しくいひわたり侍りけるにつれさくのみ侍りければ

業平 朝臣

業平一本仲平と
ある方よろし
たのめつはた
のみに思はせな
からなり

頼めつゝあいで年ふるいつのりにこりぬ心を人の知らさん
かへし

伊 勢

夏虫のゑるゝ惑ふ思ひをばこりぬかさしと誰か見ざらん
かへしせぬ人に遣ひしける

讀人 玄らさ

打わひての歌古
今戀一に出たり

打わびてよばゝん聲に山彦のこたへぬ山のあらじと思ふ
かへし

まにくはした
かひての通り
なさいふ意なり

山彦の聲のまにくとひゆかばむさしき空に行やかへらん
かくいひかひす程に三年ばかりにあり侍りければ

うつ蟬のむな
くさいはん料也

涙川ハ伊勢にも
陸奥ハもあれど
此歌ハ涙の流
る所ハみよ
名ハわかすは
江ハ川ハ他ハ
入ル湖ハ流
入ル湖ハ流
入ル湖ハ流
入ル湖ハ流

門よりハ女の門
の前をの意なり

夏引の手引にた
ゆめ糸をひきれ
やすき麻糸を云

浮草に憂きをい
ひかけたたり

馬の道を知るさ
いふ事管子韓非
子ナカもまに
て平家物語なま
にも出今世に
ても常の事なり

こまつてやらん
一本こまつてや
りてさあり

侍りけるにの
文字女と改むへ
き由つかね緒に
みゆ

わら玉の年の三年のうつせみの空しきねをや鳴てくらさん
題まらせ

ちがれ出る涙の川のゆく末のつひにあふみの海とたのまん
雨のふる日人につかひしける

雨ふれどふらねせぬる、我袖のかゝる思ひに乾かぬやあや
かへし

つゆばかりぬるらん袖のかわかぬの君が思ひの程や少あき
女の許にまかりたるに立あがら返したれば道よりつか
ひしける

常よりもませふくぞ歸りつるあふみちもあき宿に行つゝ
雨にもさへらせまできてそら物語あせしける男の門よ
りわたるとて雨のいたくふればなんまかりすぎぬると
いひたれば

濡つゝもくると見えしハ夏引の手引にたえぬ糸にや有けん
人に忘られて侍りける時

數ならぬ身の浮草と成あゝんつれあき人によるべまられじ
思ひ忘れにける人の許にまかりて

夕開の道もみえねどふる里のもとこし駒にまかせてぞくる
かへし

駒にこそまかせたりけれあやあくも心のくると思ひける哉
朝綱朝臣の女に文あせ遣ひしけるをこと女にいひつき
て久しうなりて秋とふらひて侍りければ

いづ方に言傳やらん雁がねのあふことまれに今のあるらん
男のかれはてぬにことをとをわひまりて侍りけるに
もどの男の東へまかりけるを聞てつかひしける
ありとだにきくべき物を逢坂の關のあなたぞ遙けかりける

後撰和歌集卷第十四

戀歌六

人のもとにつかひしける 讀人 志らま

逢事をよどにありてふみづの杜つらしと君をみつるころ哉

かへし

みづのもりもる此ころの春がめに恨みもあへま淀の川浪

みづからまできて夜もすがら物いひ侍りけるに程もあ

くわけ侍りにければまかりかへりて

うきよの思ふ物から天のどの明るいつらき物にぞ有ける

女の許に遣ひしける

恨むれどこふれを君がよと共に去らま顔にてつれあかる覺

かへし

恨むともこふともいかゞ雲井より遣けき人を空にまるべき

みつからまてき
て女の許にま
かりてさすへし
さつかれ緒にみ
ゆきよの愛世に
愛き夜を兼たり
よと共にな常々
さいふ事なりさ
れ此歌にてい
長き月日をさ
はんか如し

まづ機にへつる
程なり色々さ
まに思ひ乱
れて思はず日
ふを機縁にて
いへるなり
糸の絶す一本
糸のたまでい
あり

うきなも知らて
方打かへして彼
るやうに心ひあ
したるなりひな

いひわづらひてやみにける人に久しう有て又遣ひしける
まづ機にへつる程あり白糸のたえぬる身どの思ひざらあ
かへし

へつるより薄くありにしまづ機の糸の絶まもかひやあか覺
男のまできてすき事をのみしければ人やいかゞ見るら
んとて

くることひ常あらまとも玉蔓頼みいたえじとおもほゆる哉
かへし

玉蔓頼めくる日の數のあれをたえくにていかひあかりけり
男の久しう音づれざりければ

いにしへの心あくや成にけん頼めしことのためえて年ふる
かへし

いにしへも今も心のあければぞ愛をも去らで年をのみふる

うき橋一本うち
橋とあり

年頃久しう云々
俗に其後久し
を御無沙汰に打
過ましたさいふ
に同じ
時鳥の詞書に五
月はかりとあり
て其頃のものは
いへる也

教ふる人も以下
一本教ふる人も
なかりけられど心
づかりさぶらへ
ありける返事にさ

男のたいかりける時の常にまうでけるが物いひて後の
門よりわたれどまでこざりければ

たえざりしむかしだに見しうき橋を今の渡ると音にのみ聞

いひ侘て二年斗音もせせかりにける男の五月ばかりに

まうできて年頃久しう有つるおと云てまかりにけるに

忘られて年ふる里のやどゝぎすかに一聲おきてゆくらん

題えらま

どふやとて杉おき宿にきにたれど戀しき事をえるべかりける

物いひわびて女のもとにいひやりける

露の命いつとかえらぬ世中にあせかつらしと思ひおかるゝ

女のほかに侍りけるをそこにとをしふる人も侍らざり

ければ心づからとぶらひて侍りける返事に遣ひしける

狩人の尋ぬる鹿のいさび野にぬいでのみ社あらまをしけれ

忍びたる女の許よりあどか音もせぬと申したりければ

右大臣

小山田の水あらかくにかくばかり流れそめての絶ん物か

男のまでこでありくゝて雨のふる夜おほがさをこひに

つかひしたりければ 伊衡朝臣女いまき

月にだに待程おほく過ぬれば雨もよにこじとおもほゆる哉

はじめて人に遣ひしける 讀人えらま

思ひつゝまだいひそめぬわが戀を同じ心にえらせてしがな

いひわづらひてやみにけるを又思ひ出るとぶらひ侍り

ければいと定めおき心かあといひて飛鳥川の心をいひ

つかひして侍りければ

あすか川心の内にあがるれば底のえがらみいつかよどまん

思ひかけたる女の許に 朝頼朝臣

あすか川の心は
古今集下に世中
は何常なるあ
すか河昨日の淵
そ今日は潮にな
るさある歌の事
なり

大かさハハ抄行旅
なり和名抄行旅
具に笠俗云大笠
とあり

一本思ひける哉
とあり

ためしハ先例の
意なり

影みれハ外の歌典
へ入るさ外へ出
るさな對へてあ
やさなせるなり

なりハ心くかな
のなりハ心くかな
にて段々ハ心く
かへハ心くかな

み、なしの山あらずとも呼子鳥何かいさかんと時あらず音を
つれなく侍りける人に
忠 岑
戀侘てまぬてふ事のまだあきを世のためしにも成ぬべき哉
立よりけるに女にげて入れればつかいしける

讀人まらず

影みればおくへ入ける君によりあどか涙のとへいづらん
逢にける女の又あひざりければ

まらざりし時だにこえしあふ坂をあど今更に我まどふらん

藤原 蔭基

わかずして枕のうへに別れにし夢路を又もたづねてしがあ

讀人まらず

音もせずありも行かな鈴鹿山こゆてふ名のみたかく立つ、

かへし

こりハ木をこる
に戀をかけたる
なりハ心くかな
詞を重れて強し
いふ中にはさく
むてハ心くかな
あふハ心くかな
男のみ山木のこ
りも云々さいて
ひたるに木斧にて
初たてたるなり
きて物いふ云々
源氏の君さ朝顔
齊院の御中な
と似たるさま也
と新抄にみゆ

染川の筑前國に
あり

越ぬてふ名をあ恨みを鈴鹿山いとま近くあらんと思ふを
女に物いんとてきたりけれどもこと人に物云ければ
歸りて

我爲に且つらしとみ山木のこりともこりぬかゝる戀せじ

かへし

あふてあき身とてまゝ戀すとしてあけきこり積人のよきか

戒仙 法師

朝ごとに露のかけども人こふるわが言の葉の色もかいらす

きて物いひける人の大方のむつまじかりければ近うの

讀人まらず

ま近くてつらきを見るのうけれども愛の物かゝ戀しきよりの

藤原さねたい

女の許につかひしける
つくしある思ひそめ川渡りあは水やまさらんよどむ時あ

そめ川の一本染
川をさあり心つ
筑紫をかねたり

かくしやはせん
一本からしやん
せんさあるそ正
しひるまをさて
は管葉までを空
ふ事反故にし給
き事ひあるまし
たいひて花盛は過
めたりさも來て給
めたるなるへふく
た新抄にいわれし
忘草何をか云々
古今集戀五に忘
草何をか種さ思
ひし心なりけり
人の心なりけり
おししよの忌々
意ふり

かへし

讀人 去らす

渡りてのわたに赤るてふそめ川の心づくしに成もこそすれ

男のもどより花盛にこんといひてこそざりけれ

花盛すぐし、人のつらけれを言の葉をさへかくしやのせん

をどこの久しうとのざりけれ

とふ事をまつに月日このゆるぎの礎にや出て今のうらみん

わひ去りて侍りける人の許に久しうまからざりけれ

忘草何をか種と思ひしといふことをいひ遣のしたり

けれ

讀人 去らす

忘草名をもゆゝしみかりにてもおふてふ宿の行てだに見じ

かへし

うきことのまげき宿に忘草植てだにみじあきぞわびしき

女ともろとも侍りて

かき所なき思と
にやるせもない
といふに同じ

かへし

かき所なき思としき、つれば我にくらもあらじとぞ思ふ

元長親王に夏のさうぞくしておくとてそへたりける

南院式部郷のみこの女

わがたちてきるこそうけれ夏衣大方とのみ見べきうすさを

久しうとのざりける人の思ひ出て今霄までこん門さ

であひまてと申してまでこそざりけれ

讀人 去らす

やへむぐらさしてし門を今更に何にくやしくわけて待けん

人をいひむづらひてこと人にわひ侍りて後いかいあり

けんはための人に思ひかへりて程へにけれ

をして扇に高砂のかたかきたるにつけて遣のしける

かき所なき思と
しは所々方々に
分けて置く意に
さりなして答へ
たるなり
元長親王の式部
卿にて陽成天皇
御三の皇子なり
一はほかたの
一本大方にこそ
さあり
八重葎の歌古今
集下に今更にこ
ふべき人もも
てほえず八重葎し
て門させりてへ
さあるを本歌に
してよめるなる
へし
高砂のかた高砂
の山の惣名なれ
はこいもたの山
の生たる山の
給されほしきな

妻なき時の男
の他女にあひし
なきくして妻な
き戀といひ女は
せたれと此女は
そなよく知り居
る故にいよく居
つれなきさまに
いへるなり

絶せぬ物の云々
拾遺集につきて
ぬ物の涙也けり
さしていれり

歸り來し路を越
るにいひかけた
るなり

讀人もいふみ人
まらすさいふに
同し此所までハ
皆よみ人まらす
と有て此所には
さめてよみ人も
よみ人まらすさ
出たり
思ふ方にも云々
一本思ふ方にぞ
あり
あす川の歌上
の戀三に出たり

源庶明朝臣

さを鹿の妻なきこひを高砂のをへの小松さゝもいれせん
かへし

讀人まらせ

さを鹿の聲高砂にさこえしの妻なき時の音にこそありけれ
思ふ人にえあひ侍らで忘れにけれ

せきもあへせ涙の川の瀬を早みかゝらん物と思ひやのせし
題まらせ

瀬を早みたえせ流るゝ水よりもたえせぬ物の戀にぞ有ける
こふれせもあふよあき身の忘草夢路にさへやおひ茂るらん
よの中のうきりあべてもあかりけり頼む限ぞ恨みられける
頼めたりける人に

夕されば思ふまげきまつ人のこんやこじやの定めあければ
女につかりしける
源よし朝臣

厭われて歸りこしぢの白山のいらぬにまどふ物にぞ有ける
題まらす

讀人も

人あみにあらぬ我身の難波ある芦のねのみぞまたにあがるゝ
白雲のゆくべき山もさだまらせ思ふかたにも風によせせん
世中に猶ありあけのつきあくて關に越ふをとぬつらしさ
さだまらぬ心ありと女のいひたりければつかのしける

贈太政大臣

飛鳥川せきてとひむる物ならば淵瀬にあると何かいれん
久しうまかり通ひせありければ十月ばかりに雪の少し
降たるあしたにいひ侍りける

右 近

身をつめば哀ぞ思ふ初雪のふりぬることも誰にいひまし
源正明朝臣十月ばかりに床夏を折て送りて侍りければ

讀人まらせ

白雪の家集にハ
白雪とありさ
りぬへし
れこの方まさ

我戀し抄に戀し
のしハ助字なり
こひを火にそへ
て我の空に消れ
んなりさある
が如し
兼集にハあり
る也けりさあり

あらたまの云々
新年の明日の
間に相坂山を
おるに君に逢
るに我の感ゆ
事ハ年の感ゆ
てハありつ逢
ハてハありつ
ハてハありつ

冬なれど君が垣をにさきぬればうべと夏に戀しかりけり
女の恨むる事ありて親の許にまかり渡りて侍りけるに
雪の深く降て侍りければあしたに女の迎に車遣りしけ
る消息にくいへて遣りしける
兼輔朝臣
白雪のけさの積れるおもひ哉あいでふる夜の程もへかくに
かへし
讀人まらず

まら雪のつもる思もたのまれ春より後のあらじと思へば
心ざし侍る女宮づかへし侍りければあふ事難くて侍り
けるに雪のふるにつかひしける
我戀し君があたりをはかれねばふるまら雪も空にさゆらん
かへし
山がくれ消せぬ雪の侘しき君まつ葉にかゝりてふる
物いひ侍りける女に年のはての頃はひ遣りしける

あらたまの年の今日あすこえぬべし逢坂山を我やかくれん
藤原時雨

うして抄に懐し
なりいきさほる
心也さあるは遠
へり倦しての音
便なりき新抄に
みゆ

うけは和名抄源
釣具に泛子和名
宇介とあり是を
憂けにいひひげ
たるなり
おほきにはいま
うち君の小一條
大政大臣忠平公
なり

かへし

行平朝臣

恨きき思のつきのあくばこそ正木のかつらよりもあやまゆ
世の中を思ひうじて侍りける頃 業平朝臣

住わびぬ今の限と山ざとにつま木こるべきやどもとめてむ
我をまりがほにさいひそと女のいひ侍りける返事に

躬恒

足引の山におひたるまらがしのまらとあ人を朽木ありども
姿あやしと人の笑ひけれバ

伊勢の海のつりのうけあるさまかれと深き心の底に沈めり
おほきおほいまうち君のまら川の家にまかりわたりて
侍りけるに人のさうしにこもり侍りて

中務

白川の瀧のいとみまほしけれとみだりに人をよせと物とや

かへし

おやさかやいまうち君

白川の瀧のいとあみ乱れつゝよるをぞ人のまつといふある
はちすのはひをとりて 讀人まらと

蓮葉のはひにぞ人の思ふらんよにこひぢの中におひつゝ
逢坂の關に庵室を造りて住侍りけるに行かふ人を見て

蟬丸

これやこのゆくも歸るも別れつゝまるも知らぬも逢坂の關

小野小町

あまのすむ浦こく舟のかぢをあみよをうみ渡る我ぞ悲しき
わひまりて侍りける女心にもいれぬさまに侍りけれバ

こと人の心ざしあはにつき侍りにけるをあやしもあは
ま物いれんと申し遣ひしたりけれと返事もせず侍りけ
れバ 讀人まらと

白川の瀧のいとみまほしけれとみだりに人をよせと物とや
白川の瀧のいとあみ乱れつゝよるをぞ人のまつといふある
はちすのはひをとりて
蓮葉のはひにぞ人の思ふらんよにこひぢの中におひつゝ
逢坂の關に庵室を造りて住侍りけるに行かふ人を見て
これやこのゆくも歸るも別れつゝまるも知らぬも逢坂の關
あまのすむ浦こく舟のかぢをあみよをうみ渡る我ぞ悲しき
わひまりて侍りける女心にもいれぬさまに侍りけれバ
こと人の心ざしあはにつき侍りにけるをあやしもあは
ま物いれんと申し遣ひしたりけれと返事もせず侍りけ
れバ

こゝ人の他の
女のまらと

滋千鳥の歌一五
三四二句を置
法皇の宇多法皇
の御事なり

かへても山伏
すくしたるに
かくしつたり
つらひに世を
果たる身さ
意なり
四院の后の淳和
帝の后なり
松の浦嶋の陸奥
齋院の御禊の垣
下四月午の日
川原にて後有て
後供奉の人々に
饗を給ふに其日
供奉せさるし人
垣下といへり俗
はにいふ相伴の心

滋千鳥かひさかりけりつれもあき人のあたりいさき渡れども
法皇寺めぐりし給ひける道にてかへでの枝を折て

索性法師

此みゆき千年かへでも見てしがあかゝる山ふし時に逢べく
西院の后おやんぐしおろさせ給ひてれこあひせ給ひけ
る時彼院の中嶋の松をけづりてかきつけ侍りける
音にさく松が浦嶋今日ぞみるうべも心あるあまのすみけり
齋院のみそぎの垣下に殿上の人々まかりて曉に歸りて
うまが許につかひしける
右衛門
われのみいたちもかへらぬ曉にわきてもおける袖の露かき
まやあきとしたらみあへてと侍りければ

忠見

盃といへばあくても辛き世中にいかにあへたるたらみある覽

ひたれぬ物に
綿を入れたる
をふせく物に
ひしかり
住吉の岸さい
はん料にて岸を
着じにひなし
沖つ浪の打かけ
さいはん料にて
直垂の裏を浦に
いひなしたる也
法皇の宇多上皇
なり昌泰二年十
月廿四日仁和寺
にて御落髮の大
日本記落髮大鏡
にみ

そなからあらぬ
影の影なから
かばれる影にて
出家の御形を云

ひたれぬ物に遺りしなるに裏あんあきそれの若じと
やいかいといひたれば 藤原元輔
住吉のきじともいひおきつ浪僧打かけようらいあくととも
法皇はじめて御ぐしおろし給ひて山ふみま給ふあひだ
后をはじめ奉りて女御更衣あやひとつ院にさふらひ給
ひける三年といふにかん帝かへりおのしましたりける
昔のこと同じ所にておろし給うけるついでに

七條の皇后

言の葉にたえせぬ露のかくらんや昔覺ゆるまどおしたれば
御かへし 伊勢

海どのみ圓居の中い成ぬめりそあがらわらぬ影の見ゆれば
志賀の唐崎にてはらへしける人のまもづかへにみると
いふ侍りけり大伴黒主そこにまできてかのみるに心を

年を経ての歌後
漢書の衛青傳に
みゆたる合浦の
珠の故事にてよ
まれたるなり
賈誼の正引十八
日天皇弓場殿に
臨み給ひて弓を
御覽するを云
かへりたるのあ
るし事果て後
大將射手に嬰を
給ふを云
まつりまゝ人の
條をよめり
栗田の神樂岡北
と拾芥抄にみゆ

かけりける

忠

岑

年をへて濁だにせぬさび江に玉もかへりて今をすむべき

兼輔朝臣宰相中將より中納言にありて又の年のり弓の

かへりだちのあるじにまかりてこれかれ思をのぶるつ

いでに

兼輔朝臣

ふるさとのみかさの山に遠けれをこゑの昔のうとからぬ哉

淡路のまつりごと人の任はてゝのぼりまうできての頃

兼輔朝臣の栗田の家にて

躬

恒

ひき植し人のうべこそ老にけれ松のこだかくきりにける哉

人のむすめに源かねきがすみ侍りけるを女の母聞侍りて

いみじうせいし侍りければ忍びたる方にて語らひける

間に母老らせして俄にいさければかねきがにげてまか

りければ遣ひしける

女の母

ひたふるのわ一向
に引板をわわた
三條石大臣の定
方公也承平二年
八月四日薨公
卿補任にみゆ
大臣にせられ給ふ
に任せられ給ふ
仲平公なり
齋宮のみこは
子内親王に御
母の藤公の御
三條右大臣の御
なれはむすめは
女御の御をばに

さひたちわへし
一本飛立ぬへき
とあり

小山田のおどろかしにもこざりしをいとひたふるに遣し君哉

三條右大臣みまがりてあくる年の春大臣めしありと聞

て齋宮のみこにつかひしける

むすめの女御

いかでかの年ぎりもせぬ種もが荒たる宿に植てみるべく

かの女御の左のおほいまうち君にあひにけりどきとて

遣ひしける

齋宮のみこ

春毎に行てのみ見ん年ぎりもせせといふ種のかひぬどか聞

庶明朝臣中納言にあり侍りける時うへのきぬつかひす

とて

右大臣

思ひさや君が衣をぬぎかへてこきむらさきの色をきんとん

かへし

庶明朝臣

いにしへもちぎりてけり赤打はぶきとび立ぬべし天の羽衣

雅忠がとのる物をとりたがへて大輔が許にもてきたり

ければ

大 輔

ふる里のちらの都のはじめよりきれにけりとも見ゆる衣か

かへし

雅 正

ふりぬとて思ひも捨て唐衣よそへてあやあうらみもぞする

世中の心にかきぬちど申しければ行さき頼もしき身

にてかゝる事あるまじと人の申し侍りければ

大江 千里

流れてのよをも頼まず水の上の沫に消ぬるうき身と思へば

藤原さねさが藏人よりかうぶり賜りてあす殿上まか

りおりきんとまける夜酒たうべけるついでに

兼 輔 朝 臣

ぬば玉の今宵ばかりぞわけ衣わけあべ人をよそにこそ見ゆ

法皇御ぐしおろし給ひての頃 七 條 后

流れての世の水の縁にて行末の世といふに同じし
抄云六條藏人四年奉公の後巡時
給はるるに
あけ衣ハ五位の袍なり

長柄の橋のふりぬる事にいへり

人わたす事だにさきを何しかもあがらの橋と身の成ぬらん

伊 勢

ふる、身の涙の中にみゆればや長柄の橋にあやまたるらん

京極の御息所尼に成て戒うけんとて仁和寺にわたりに

侍りければ あつみのみこ

獨のみあがめて年をふる里の荒たるさまをいかに見るらん

女のあだちりといひければ 朝 綱 朝 臣

まめされどあだ名の立ぬたれ嶋よる白浪をぬれ衣にきて

あひかたらひける人の家の松の梢のもみぢたけけるを

見て 讀 人 玄 ら 老

年をへて頼むかひあし常磐ある松のこずゑも色かひりゆく

男の女の文を隠しけるを見てもとのめのかきつけ侍り

ける 四 條 御 息 所 女

敦賀親王ハ宇多
第八の皇子にて
天曆四年に出家
せさせ給ひ仁和
寺にまはしまし
と号し奉れり
と相撲さあれに
ハ雲御抄に肥後
とある方正し
るへし
女のいさ女
さいふ意なり

うき橋の憂きを
しなりにいひかけ
四國の討手の使
の朝延にそむき
奉りたるさむき
年に好て天慶三
年正月好古朝臣
追捕海賊使さ成
て下られたるな
いふ

ふた年ハ蓋に二
をかれあけな
らハ匣の縁に排
なかれ身もあハ
ぬし共に玉櫛笥
の縁語也

前太政大臣ハ冬
嗣公の二男贈正
一位良房公也

ひかけにたふる
ハ天皇の大御事
のうき事をい
へるあるへし
關寺ハ近江國志
賀郡にあり

日くらしさいふ
事ハ彼家の内の
人々たはふれ言
に日くらしさい
ふことなるへし
へりしなるへし
と束緒にみゆ

へだてつる人の心のうきはしを危きまでもふみ見つるかき
小野好古朝臣西の國のうての使にまかりて二年といふ
年四位にハ必まかりあるべかりけるをさもあらまきり
にければかゝる事にしもさゝれにける事の安からぬ由
を憂へ送りて侍りける文の返事の裏にかきつけて遣ハ
しける
源公忠朝臣

玉櫛笥二年あハぬ君が身をわけあがらやハあらんと思ひし
かへし
小野好古朝臣

わけあがら年ふる事ハ玉くしげ身のいたづらにきれば也けり

後撰和歌集卷第十六

雑歌二

思ふ心ありて前太政大臣によせて侍りける

在原業平朝臣

頼まれぬ憂世の中を歎きつゝ日かけにおふる身をいかにせん
やまひし侍りて近江の關寺にこもりて侍りけるに前の
道より閑院のむ石山に詣でけるをたい今かん行過ぬる
と人のつげ侍りければおひてつかひしける

敏行朝臣

あふ坂のゆふつけにきく鳥の音を聞どがめまぞ行過にける
前中宮宣旨贈太政大臣の家よりまかり出てあるにかの
家にことにふれて日ぐらしといふことかん侍りける

宣旨

侍りけるにの
左のさふに
補ふし大東
緒にあり左
平公にて敦
忠朝臣の父
ちか集はれし
古今の歌
くまひの隈
駒さめては
水かへ影を
みんかある
下句を取用
時に臨みて
たすにみへ
るなるはし
れちて

みこし岡の
北野の西川
のりての神
西の岸抄に
ありの抄に
み北の

み山よりひいき聞ゆる日ぐらしの聲を戀しみ今もけぬべし
かへし
贈太政大臣

日ぐらしの聲を戀しみけぬべく深山はどりに早もさねかし
河原に出てはらへし侍りけるにおほいまうち君もいで
あひて侍りければ
敦忠朝臣母

誓われし加茂の河原に駒とめてまばし水かへ影をだに見ん
人の牛をかりて侍りけるにまに侍りければいひ遣ひし
ける
閑院のこ

わがのりしことをうしとや消にけん草葉にかゝる露の命の
延喜御時賀茂臨祭の日御前にてさかづきとりて

三條右大臣

かくてのみやむべきものか千早ふる賀茂の社の萬代をみん
同じ御時北野の行幸にみこし岡にて

枇杷左大臣

御輿岡いくその世々に年を経て今日の行幸を待て見つらん
戒仙が深き山寺に籠り侍りけるにこと法師まうできて
雨に降こめられて侍りけるに
讀人まらす
いづれをか雨どもわかん山ぶしの落る涙もふりにこそふれ
これかれ逢て夜もすがら物語してつとめてれくりける

藤原興風

思ひにのさゆる物ぞとまらきながら今朝しもおきて何にさつらん
若う侍りける時の志賀に常に詣でけるを年老ていまも
り侍らざりけるに参り侍りて
讀人まらす
珍らしや昔あがらの山の井のまづめる影ぞくちはてにける
宇治のあじろにまれる人の侍りければまかりて

大江興俊

思に日なかれ今
朝しに霜をか
けいへりわきて
も霜の縁なり
去つめる影新抄
云水に移る我形
の老衰へたる意
はさるるものに
わが時世にあは
すかたの意を聞
くめたりま聞ゆ

みなれし水駒
に見馴れし水駒
に調せさせ給ひて
ハ仰音ありて人
々に扇を作ひて
牽らせ給ひたる
なり

秋風を一本風な
れハさあり

たえなんの糸の
共に蜘蛛の糸の
なり

男ハ誰さもまら
れ任せ陸奥
の任な下に娶
る具して下りた
し

うぢ川の浪にみかれし君ませバ我もあじろによりぬべき哉
院のみかど内にかいしまし、時人々に扇てうせさせ給
ひける奉るとて
小貳のめのと
ふき出るねどころ高く聞ゆかりはつ秋風にいざ手きらさじ
かへし
大 輔
心してまれにふきくる秋風を山おろしにのきさじとぞ思ふ
男のふみ多く書てといひければ 讀人まらす
はかちくて絶ちんくもの糸故に何にか多くかゝんとすらん
鞍馬の坂をよるこゆとてよみ侍りける
亭子院にいまわこどめしける人
昔よりくらまの山といひけるいわがごと人もよるや越けん
男につけてみちのくにへむすめを遣ひしたりけるが其
をとこ心變りたりと聞て心うしと親のいひ遣ひしたり

けれバ

讀人まらす

かへし

女 の 母

心の空なる
新抄云其事の
を思ひて他の
ちつつかす耳
ハ眼にやうの
つつかぬの心
也此歌親の心
推此歌親の心
もさし見れハ
りに哀なる歌
りし

すなはちハた
ちの意あり

望月の信濃の牧
の名なるをや
て馬の名の如く
なれるに月をか
ねこまハ木間に
駒をかねたり

雲井路の遙けき程のそらごどいにかかる風の吹てつげん
かへし
あま雲のうきたる事ときししかどちぞ心の空にありにし
たまさかに通へりける文をこひかへしければその文に
ぐして遣ひしける
もとよしの親王
やれバをしやらねバ人に見えぬべし泣々も猶返すまされり
延喜御時御馬を遣ひして早くまゐるべき由おせつか
いしたりければ即まゐりておせせごうけたまひれる
人につかひしける
素性法師
もち月のこまより遅く出つればたどるくぞ山いこえつる
病して心細しとて大輔につかひしける

藤原敦敏

神かけていへば
いひしき物いへり
おのしき物いへり
らたなるを云

あれたるは今見
ぬたる海上の波
荒て騒かしく波
のたつをみるに
よりていへる也
南殿の紫宸殿を
いへり

藻屑に沓をそへ
たり

萬代と契りしことのいたづらに人わらへにもあがりぬべき哉

かへし

大

輔

かけていへばゆゝしき物を萬代と契りし事や叶ひざるべき
霞のふるを袖にうけてきえけるを海のとりにて

讀人まらす

ちるとみて袖に受れぬたまらぬの荒たる涙の花にぞ有ける
ある所のわらひ女五節見に南殿にさぶらひて沓を失ひ
てけりすけんどの朝臣藏人にてくつをかして侍りける
をかへすとて

立騒ぐ涙まを分てかづきてしおきのもくづをいつか忘れん

輔臣朝臣

かへし

かづきてし沖のもくづを忘れずの底のみるめを我にからせよ
人の裳をぬりせ侍るにぬひて遣りすとて

やみかたの愈方
なり

白雲に死の事を
雲さなるさいふ
の火葬の煙より
いへるなり

水に見るをかれ
たり

よらん諸人の清
へよらん事清へ
いふ意なり清へ
よるさ人の清へ
ふふに隨ふをい
いふ

讀人まらす

眼あく思ふ心につくばねのこのもやいかいあらんとすらん
男のやまひしけるをどぶらひでありくてやみがたに
とへりけれバ

思ひ出でとふ言の葉を誰みまし身の白雲にありあましかバ
みそか男したる女をあらくいひてとへど物もいひさ
りけれバ

忘れあんと思ふ心のつくからに言の葉さへやいへばゆゝしき
男のかくれて女を見たりけれバつかひしける

隠れぬて目がうきさまをみづの上の涙とも早く思ひ消せん
世中をどかく思ひわづらひける程に女友だちある人猶
わがいのんことにつきねと語らひけれバ

人心いさやまら涙たかければよらんあきさぞかねて悲しき

毛を吹き疵を求むさいふ事韓非子又漢書にみゆ

こらちる花一本こらある花さあり

うしほは憂しに潮をそへたり

いたくこと好む由を時の人いふときよて

高津内親王

直き木に曲れる枝もある物をけをふき疵をいふがわりあき

帝に奉り給ひける 嗟 峨 后

移るぬ心の深くありければこらちる花春にあへるごと

これかれ女の許にまかりて初いひあせしけるに女のあ

あさむの風やと申しければ 讀人まら老

玉だれのあみめのまより吹風の寒くのをへていれん思ひを

男の物いひけるを騒ぎければ歸りて朝に遣ひしける

白浪の打さわがれて立しかば身をうしやにぞ袖ぬれにし

かへし

とりもあへず立騒がれしあだ浪にあやかく何に袖の濡けん

題しらす

衣の關陸奥磐井郡にあり

逢はぬ間に云々あふ嬉しさを心まごひをいひんさての歌なり

いふまじし云々恨むるさまにて度々いきまもてくる氣色なきを解歎くる心なるへた糸の縁にてまたた

汲見てん水の縁にいへるにて意ひよりてんて

たうちとも頼まざらん身に近き衣の關もありといふかり

友達の久しくあひざりけるにまかりあひて詠侍りける

あひぬまに戀しき道もまりにしをあせ嬉しきにまごふ心ぞ

題しらす

いかかりし節にか糸の乱れけんまひてくれども解きみゆるの

人のめに通ひける見つけられ侍りて

賀朝法師

身あぐとも人にしられし世中に知られぬ山を知る由もがあ

かへし

もとのをどこ

よの中にまられぬ山に身あぐともたにの心やいので思はん

山の井の君に遣ひしける 讀人しらす

音にのみ聞いてのやまは浅くともいざくみ見てん山の井の水

やまひしけるをからうじておこたれりと聞て

死出の山の歌人
の許にいかいひ
やるまなれい何
る互に世な恨み
厭ふへき事のあ
は戯にてもあ有
べし折る事あ有
歌ならぬの歌戀
の歌さみても迷
懐の歌さみても
いつれにてもき

光みぬさすの帝
の未さけさせ給
はぬをたさへい
へるなり

わするさの歌へ
は山の推業の葉
かへすも君
ふかへせしむり
ふ古歌によりて
よめるなり
人の國ハ京より
他國をさしてい
へる也

こもり侍りける
女の女さいふ
字ハ除くへき由
つかね緒にみゆ

朝なけハ常々さ
いふ意なり

までの山たどるくもこえさゝんうき世の中に何歸りけん
題まらせ

數あらぬ身を重荷にて吉野山たかきかげきを思ひこりぬる
かへし

吉野山こねん事こそ難からめこらんあけきの數ハ知りあん
陽成院の帝時々どのぬにさふらのせ賜ひけるを久しう
めしあかりければ奉りける
武 藏

數あらぬ身にれくよひの白玉ハ光みえさす物にぞありける
まかり通ひける女の心とけさのみ見え侍りければ年月
も経ぬるを今さらかゝる事といひつかのしたりければ

讀人まらせ

難波がた汀のあしのおひ風にうらみて予ふる人のこゝろを
女の許より恨みおこせて侍りける返事に

忘るどの恨みざらあんはし鷹のとかへる山の椎ハもみぢす
昔同ト所に宮づかへし侍りける女の男につきて人の國
にかちぬたりけるを聞つけて心ありける人あればいひ
遣ハしける
をちこちの人めまれある山里にいへぬせんとの思ひさや君
かへし

身をうしと人えれぬよを尋ねこし雲の八重たつ山にやのあらぬ
をとこあど侍らすして年頃山里に籠り侍りける女を昔
あひえりて侍りける人道まかりけるついでに久しうさ
こえざりつるをこゝにかりけりといひ入て侍りければ

土 佐

朝あげによの愛事を忍びつゝあがめせしまに年のへにけり
山里に侍りけるに昔あひえれる人のいつよりこゝに

すむぞと問ひければ

閑院

春やこし秋や行けんおぼつかあかけの朽木と世を過す身の

題玄ら

貫之

世中のうき物奪れや人ごどのとにもかくにもきこえ苦しき

讀人玄ら

武藏野の袖ひづばかり分しかせ若むらさきの尋ねわびにき

暇にてこもりゐて侍りける頭人のどいず侍りければ

壬生忠岑

大荒木の森の草とや成にけんかりにだにきてとふ人のあき

ある所に宮づかへし侍りける女のあだ名立けるがもと

よりおのれがうへのそこにせんくちののにかけていの

るさど恨み侍りければ

讀人玄ら

あはれてふことこそ常の口のほにかゝるや人を思ふある覺

大荒木の森の草とや成にけんかりにだにきてとふ人のあき
ある所に宮づかへし侍りける女のあだ名立けるがもと
よりおのれがうへのそこにせんくちののにかけていの
るさど恨み侍りければ
あはれてふことこそ常の口のほにかゝるや人を思ふある覺

題しらす

伊勢

吹風の下の塵にもあらくにさもちりやすきわがあき名哉

春日に詣でける道にさや川のやとりに初瀬より歸る女

ぐるまのあひて侍りけるがすだれのあきたるより僅に

みいれければあひまゐりて侍りける女の心ざし深く思ひ

かひしあがら憚る事侍りてあひ離れて六七年ばかりに

成侍りにける女に侍りければ彼車にいひいれ侍りける

閑院左大臣

ふる里の佐保の川水けふも猶かくてあふせの嬉しかりけり

枇杷左大臣よう侍りてあらの葉をもどめ侍りければ千

兼があひまゐりて侍りける家にどりにつかひしければ

俊子

我宿をいつちらしてか檜の葉をあらし顔にの折におこする

ふる里の佐保の川水けふも猶かくてあふせの嬉しかりけり
枇杷左大臣よう侍りてあらの葉をもどめ侍りければ千
兼があひまゐりて侍りける家にどりにつかひしければ
我宿をいつちらしてか檜の葉をあらし顔にの折におこする

ならの葉の大和
物語にかしは木
にとあり

かへし

枇杷左大臣

檜の葉の葉守の神のましけるをえらでぞ折し崇りささる者
友達の許にまかりてさかづきあまたゝびに成にければ
通てまかりけるをといめわづらひもて侍りける笛を取
といめて又の朝に遣りしける 讀人しらす
かへりての聲やたがらん笛竹のつらき一よのかたみと思へば
かへし

思ふ心ありを抄
に我酒を忘れぬ
心あれはさなり
さあるはさなり
なるさまなり
は交情を思ふ事
なるへし
名簿の今世にい
ふ名札にて我姓
名をわきて或は
弟子さならん事
を乞ふ高貴の
人の家に入らる
事なふなさに
兼忠朝臣の母ハ

ひとふしにうらみをはてそ笛竹の聲のうちにも思ふ心あり
もとより友達に侍りければ貫之にあひ語らひて兼輔朝
臣の家に名簿を傳へさせ侍りけるに其名つきに加へて
貫之におくりける 躬 恒
人につくたよりだにさし大荒木の森の下ある草の身おれば
兼忠朝臣母みまがりにつれれば兼忠をば故枇杷左大臣の

昭宣公の女にて
枇杷左大臣仲平
公にも后宮穆子
にも妹なり

家にもすめをば后の宮にさぶらひせんといひ定めて二
人おがらまづ枇杷の家に渡し送るとてくへ侍りける

かたみは篋に形
見をかね子に籠
をかけたるなり

兼忠朝臣母のめのこと

結び置しかたみのこだにさかりせば何に忍の草をつまし
物思ひ侍りける頃やんとさき高き所よりといせ給へ
りければ 讀人えらす

嬉しきもうきも心ひひとつにてわかれぬもの涙ありけり
世の中の心にかきぬ事申しけるついでに 貫 之

うき世そむかん
云々六帖憂世を
捨ん方しなけれ
はさあり

惜からでかきしき物の身ありけり憂世そむかん方をえらねば
思ふ事侍りけるころ人に遣りしける 讀人えらす

こそ一本時て
さあり

思ひ出ることぞ悲しきよの中へ空ゆく雲のはてをえらねば

女の許よりあだにきてゆることあどいひて侍りければ

左大臣

あだ人もあきにいあらず有あがら我身にいまだ聞ぞ習いぬ

題えらす

讀人も

宮人どならまほしきを女郎花野べよりきりの立出てぞくる

かしてまる事侍りてさどに侍りけるを忍びてさうしに

まぬれりけるをおほいまうち君のあどか音もせぬあど

うらみ侍りければ

大輔

我身にもあらぬ我身の悲しきい心もことにありやまにけん

人のむすめに名立侍りて

讀人えらす

世中をえらあきがらもつの國のあにい立ぬる物にぞ有ける

あき名たちける頃

よと共に我ぬれきぬとある物いわふる涙のきするありけり

宮人抄云宮つ
の女花の露間
にたてるな見へ
よめるなるへし
かしこまる事い
まほやけのみけ
しきにたかへる
心なり
曹子の禁中の局
にいふ
羅波に名にひな
そへいへり

五節の師の舞姫
の師なり

前坊おのしまさすありての頃五節の師のもとにつかひ

大輔

うけれども悲しき物をひたふるに我をや人の思ひすつらん

かへし

讀人えらす

悲しきもうさもえりにし一つ名を誰をわくどか思ひ捨らん

大輔がさうしに敦忠朝臣のもとへ遣いしける文をもて

たがへたりければ遣いしける

大輔

みちえらぬ物あらくに足引の山ふみまどふ人もありけり

かへし

敦忠朝臣

えらがしの雪も消にし足引の山路をたれかふみまよふべき

いひちぎりて後こと人につきぬときよて

讀人えらす

いふことの違ひぬ物にあらませば後愛ことも聞えざらまし

まらかし云々
山路もまらさ
いかに雪のふれ
り

題えらす

伊

勢

面影をわひみしかずになす時の心のみこそまづめられけれ
かしら白かりける女を見て

ぬきどめぬ髪すぢの筋もてあやしくもへにける年の敷をえる哉

題えらす

讀

人

も

かみ敷にあらぬ身あれば住吉の岸にもよらずなりや果あん
つきもせずさ言の葉の多かるを早くあらしの風も吹あん

いと忍びて語らひける女の許につかひしける文を心に

もあらで落したりけるをみつめて遣ひしける

嶋がくれありそに通ふ芦たづのふみおく跡の浪もけたあん

昔同じ所に宮づかへしける人年をろいかにぞあそとひ

おこせて侍りければ遣ひしける 伊

勢

身の早くあきものゝことありにしを消せぬ物の心なりけり

なみかすに人
なみくの敷に
の意に涙をそへ
たり

涙もけたなん
涙の消す如く消
し果よさ也さ
せて落すつら
くし根む意をふ
くめり

はらからをも妹
背さいふ事前に
いへり
くらべがたく
我より貴さき女
なごなりしなる
べし
我爲にの歌女を
鷹に比してよめ
るなり

水無瀬川山城に
あり

はらからの中にいかある事かありけん常あらぬさまに
見えければ 讀人えらす

陸まじさいもせの山の中にさへ隔つる雲のはれずもある哉
女のいどくらべ難く侍りけるを相はかれにけるがこと
人に迎へられぬと聞て男のつかひしける

我爲におきにくかりしはし鷹の人の手にありとさくハ誠か
梔子すまじある所に乞に遣ひしたるに色のいと悪かりければ
聲にたてゝいねどまゐるし口あしの色の我爲薄きありけり
題えらす

瀧つせの早からぬをぞ恨みつるみずとも音に聞んと思へば
人のもとに文遣ひしける男人に見せけりとさゝてつか
ひしける

皆人にふみせけりあみあせ川其わたりこそまづの淺けれ

侍りけるにの下の
一本前よりさあ

みつは諸説あれ
さ瑞齒さいふ説
最よろし

さわげ一本さば
けさあり

つくしの白川といふ所にすみ侍りけるに大貳藤原興範
朝臣のまかり渡るついで水たべんとて打寄てこひ侍り
けれバ水をもて出て誅侍りける 檜垣の姫
年ふればわが黒髪もまら川のみづのくむまで老にけるか
かしこに名高くことこのむ女にせん侍りける
まぞくに侍りける女の男に名立たててかゝる事せんある人
にいひさわげといひ侍りけれバ 貫 之
かざすとも立と立せんあき名をバ事あし草のかひやあか覽
題えらす
歸りくる道にぞけさの迷ふらんこれにあすらふ花あき物を
女の許に文遣のしけるを返事もせずして後々の文を見
もせで取せん置と人の告けれバ 讀人まらす
大空にゆさかふ鳥の雲路をぞ人のふみ見ぬものといふある

憂へたこせては
女の歎きやりし
なり

名草の濱を慰む
心にいひかけい
ふかひに貝をか
れたり

かの女のもさす
みし女を云

こさなしひに
事なしふりに
つめしなり

紀のすけに侍りける男のまかり通のまかりにけれバ彼
男の姉のもとにうれへれこせて侍りけれバいと心うさ
ことかきといひ遣のしたりける返事に
紀の國のあぐさの濱の君あれやことといふかひありと聞つる
すみ侍りける女宮づかへし侍りけるを友達ありける女
同じ車にて貫之が家にまうできたりけり貫之がめまら
うどにあるとせんとてまかりおりて侍りける程に彼女
を思ひかけて侍りけれバ忍びて車にいひいれ侍りける
貫 之
浪にのみぬれつるものを吹風のたよりうれしきあまの釣舟
男の物にまかりて二年ばかりありてまうできたりける
を程へて後にことあしびにこと人に名たつときし
まことありといへりけれバ 讀人しらせ

故女四のみこの
勤子内親土を云
延喜の皇女にて
九條右大臣師輔
公に配し給へり

無成れるこのみ
ハ菩提子をいふ

縁あるまつ程すきばいかでかい下葉ばかりも紅葉せざらん
故女四のみこの後のわざせんとて菩提子の老ををあん
右大臣もどめ侍るときゝてこの老を送るとて加へ侍
りける
眞延法師

思ひ出のけぶりやまさんさき人の佛になれるこのみ見バ君
かへし
右大臣

道されるこのみ尋ねて心ざしあると見るにぞ音をバ増ける
定めたる女も侍らずひとりぶしをのみすと女友だちの
もとよりたのぶれて侍りければ 讀人まらず
いづこにも身をバ離れぬ影しあれバふす床毎に獨やいぬる
前裁の中にするの木おひて侍るときゝてゆきあきらの
みこの許よりひと木こひに遣ひしたれば加へてつかひ
しける
眞延法師

淵瀬のみの我身
の浮沈をいふ

うき身なからに
長良山をそへた
り

かうしハ勘當也
隠れ渡りハ忍び
て又女のみまに
きたりしあり

風まもに色も心もかひらねバあるとに似たる植木ありけり
かへし
行明親王

山深み主人あらしに似たる植木をバみえぬ色とぞいふべかりける
大井ある所にて人々酒たうべけるついでに
業平朝臣

大井川うかべる舟のかかり火にをぐらの山も名のみ也けり
題まらず
讀人も

あすか川我身ひとつの淵瀬故あべての世をもうらみつる哉
思ふ事侍りける頃志賀にまうで

世中をいどひがてらにこしかども愛身ながらの山にぞ有ける
父母侍りける人のひすめに忍びて通ひ侍りけるを聞つ
けてかうじせられ侍りけるを月日へて隠れ渡りけれど
雨降てえまかり出侍らで籠りの侍りけるを父母聞付て

いかいせんずるぞとてゆるす由いひて侍りければ
下にのみはひわたりにし芦の根の嬉しき雨にあらわれにけり
人の家にまかりたりけるにやり水に瀧いと面白かりけ
れば歸りてつかいしける

瀧つ瀬にたれえら玉を乱りけん拾ふとせしに袖ぞひぢにき
法皇吉野の瀧御覽とける御ともにて

源昇朝臣

かひの峽にて山
と山との間を云

いつのまに降積るらんみ吉野の山のかひよりくづれ落る雪

法皇御製

宮の瀧うべも名におひて聞えけり落る白あわの玉と響けバ
山ぶみしははじめける時

僧正遍昭

今更に云々抄云
かく思ひ立て今
更に京へ歸る
まじもし問はて
瀧を見てもてよ
へどもきかすこ
答へよとたり

今更に我いかへらと瀧見つよべとさかすと問ひ答へよ
題えらす

讀人も

瀧つせのうづまき毎にとめくれを猶尋ねくるよのうきめ哉
はじめて頭おろし侍りける時物にかきつけ侍りける

遍昭

かかれしてし
ハかく出家せよ
とての意あり

たらちねのかれとしてしもう玉の我黒髪をさですや有けん
みちのくにの守にまかり下れりけるにたけくまの松の
枯て侍りけるを見て小松を植つがと侍りて任はて、後
又同じ國にまかり寄りて彼さきの任に植し松を見侍り
て

藤原元善朝臣

植し時契りやえけんたけくまの松をふた、びあひみつる哉
ふしみといふ所にて其心をこれかれよみけるに

讀人えらす

菅原の歌抄に
景氣見るとや
姿たけたか
ある如くいさ
すくれていふ
き歌といふへし

菅原やふしみのくれにみりたせば霞にまがふをはつせの山
題えらす

言の葉もあきてへにける年月にこの春だにも花のさかあんなもれて思ひ歎く
人の此春たにも
さ思へるにても
あるへし

言の葉もあきてへにける年月にこの春だにも花のさかあんなもれて思ひ歎く
人の此春たにも
さ思へるにても
あるへし

業平朝臣

三津に見をかれ
海に倦をかれた
るなり

難波津をけふこゑみつの浦毎にこれやこのよとらみ渡る舟
時にあのをして身を恨みてこもり侍りける時

文室康秀

ならへんの歌戀
五に入しを又か
くこゝにのせか
なるまきれ入し
なるへし身に寒
くの出についけ
て出のつたし
意も聞はたし

身に寒くあらぬ物からわびしき人の心のあらしきりけり
あがらへ人の心もみるべきを露のいのちぞ悲しかりける
人の許より久しうこゝちわづらひてほとくまぬべく
あん有つるといひて侍りければ 閑院大君

土左

おしなへての歌
伊勢物語に結
句月も入らしな
さわりて紀有常
の歌さみや

諸共にいざとりのいでまでの山いかでか獨こえんとせし
月夜にかれこれして 上野峯雄
ねしあべて峯もたひらに成あゝん山のはあくバ月も隠れし

北邊左大臣

人めだに見ぬぬ山路にたつ雲を誰すみがまの煙といふらん
をとこの人にもあまた問へわれやあだある心あるとい
へりければ

伊勢

あすか川淵瀬にかゝる心とみみかみしもの人もいふめり
人のむこの今まうでこんといひてまかりにけるが文を
おこする人ありと聞て久しうまうでござりければあど
うがたりの心をとりてかくせん申しけるといひつか
しける

女の母

今こんといひし斗はかを命にてまつにけぬべしさくさめのとじ
かへし

むこ

敷さらぬ身のみ物うくおもほえて待るゝまでも成にける哉
常にまうでくどてうるさがりて隠れければ遣ひしける

みなみかみしもの人もいふめり
あすか川淵瀬にかゝる心とみみかみしもの人もいふめり
人のむこの今まうでこんといひてまかりにけるが文を
おこする人ありと聞て久しうまうでござりければあど
うがたりの心をとりてかくせん申しけるといひつか
しける
今こんといひし斗を命にてまつにけぬべしさくさめのとじ
かへし
敷さらぬ身のみ物うくおもほえて待るゝまでも成にける哉
常にまうでくどてうるさがりて隠れければ遣ひしける

有さきく郭公に
それ女をよめる也
ものに社寺な
さいにこもりしな
いふ
またうつ和名抄
に襪足衣也さみ

かくばかりの歌
男に捨られし女
を思ひやりてよ
めるなり

讀人 志らす

ありときくねとの山の郭公かにかくるらんさく壁にして
ものにこもりたるにまりたる人のつばねあらべて正月
おこなひていづる曉にいときたかげあるまたらうづを落
したりけるを取て遣ひすどて

題 志らす

わしのうらのいとさたさくも見ゆる哉浪の寄ても洗ひざりけり
人心たどへてみればまら露のきゆるまもあは久しかりけり
世中といひつる物のかけらふのあるかあきかの程にぞ有ける
友達に侍りける女の年久しく頼みて侍りけるをとこに
とれれす侍りければもるともに歎きて
かくばかり別のやすきよの中に常とたのめる我予はかあき
つねになき名立侍りければ

伊勢

枕さもつなは枕
の物を知るさ
へは我名をたつ
る内妻の人の心
を枕にせまほし
さらは我何事も
なき事を知らん
にさなり
天の下に雨をそ
へてぬれきぬの
縁さしたり

あひにあひての
歌古今集戀五に
出たり

ちりにたつ我名清めんもしきの人の心をまくらともがな
あだ名立ていひ騒がれける頃ある男はのかに聞てあ
れいかに予ととひ侍りければ 小町がうまを
うき事を忍ぶるわめの下にして我ぬれ衣きぬのせどかわかず
隣寄りける琴をかりて返す序ついでに 讀人まらさ
あふ事のかたみの聲の高ければ我ちくねとも人のきかぢん
題まらさ
涙のみまゑる身のうさも語るべくちげく心をまくらともがぢ
物思ひける頃 伊 勢
あひにあひて物思ふ頃の我袖に宿る月さへぬるゝがぢぢる
ある所にて簾のまへにけれこれ物語し侍りけるを聞て
うちより女の聲にてあやしく物のあわれまりがほぢる
翁かぢといふをきゝて 貫 之

つは竹の和名抄
に苦竹の色立成
云加波多計本朝
式河竹二字竹名
也とみぬ眞淵の
女竹につきて久しく
皮のつきてある
故にいへる也さ
いひたり
深き思の歌戀五
に深き思として
入たり
心なきの歌秋中
に出たり

哀てふことにまゑるしんちけれどもいんぞんえこそあらぬ物ぢれ
女友だちの常にいひかひしけるを久しく音づれざりけ
れば十月ばかりにあだ人の思ふといひし言の葉のとい
ふ古ことをいひ遣りしたりければ竹の葉にかきつけて
つかひしける 讀人まらさ
移ろぬ名に流れたるかひ竹のいづれの下にか秋をまゑるべき
題まらさ 贈太政大臣
深き思ひそめつといひし言の葉のいつか秋風吹てちりぬる
かへし 伊 勢
心ちき身の草葉にもあらくに秋くる風にうたがひるらん
題まらさ
身の愛まなをまればはしたに成ぬべみ思へ胸の焦こがれのみする
讀人まらさ

今日ばかりを雁にそへたり

雲路をもえらぬ我さへ諸聲もろこゑにけふのかりとぞあきかへりぬる
まだきから思ひこき色にそめんどや若紫のねをたづぬらん

伊 勢

見ぬもせぬ深き心をかたりての人にかちぬと思ふものか

亭子院にさぶらひけるに御ときのおろしたまひせたり

けれバ

伊勢の海に年経て住し蟹かにかれとかゝるみるめのかづかざりしを

粟田の家にて人に遣ひしける 兼輔朝臣

足引の山のやどりのかひもなし峯のえらくも立しよらねバ

左大臣の家にてかれこれ題をさぐりて歌よみけるに露

といふ文字を支侍りて 藤原忠國

われからぬ草葉も物の思ひけり袖より外そとにかけるえらつゆ

人のもとに遣ひしける 伊 勢

亭子院の上一本伊勢いせのさあるはよるしからず

峰の白雲しらぐもはかなたの人をさしていへるなり
左大臣さだみ云々題を探りて歌よむ事は此物このものに始なるは此詞このことばそ始なるへき

人心こころ云々抄云人
の心のすけなきに涙なみだに目めもきり
ふたかり思ひまをる
いためる櫛くしにそへてよめり

すかりハ散珠さんじゆの子こなり俗しやくに弟あに子こさいへり

人心こころあらしの風のさむければこのめも見えず枝えだぞえをるゝ

こと人をあひかたらふと聞てつかひしける

讀人よみえらす

うきあがら人を忘れんことかたみ我心こころこそかひらざりけれ

ある法師ほうしの源等朝臣げんとうてうしんの家いへにまかりてすゝのすがりをか

としかけるを朝あさにかくるとて

うたゝねの床とこにとまれる白玉しらたまの君きみがおきつる露つゆにや有あらん

かへし

かひも奇あまき草くさの枕まくらにかく露つゆの何なににきえあでちとまるらん

題あはえらす

思おもひやる方もえられず苦しき心こころまをひの常にやあるらん

昔むかしを思おもひ出てむら子の内侍うちわらひにつかひしける

左 大 臣

ふる言の葉は古
音に降るをそへ
たり上句はふる
さいはん序なり
あまの肥に海士
をかねうきあは
盛目に浮相布を
うねたり
うちハ禁中なり
みをハ身を水
脈をそへたり

鈴虫にかとらぬ音こそあかれけれ昔の秋をおもひやりつゝ
獨侍りける頃人の許よりいかにぞととふらひて侍りけ
れハ朝顔の花につけて遣しける 讀人 玄らす
夕暮のさびしき物の朝顔の花をたのめるやどにぞありける
左大臣のかゝせ侍りけるさうしのおくにかきつけ侍り
ける 貫 之
は、そ山峯の嵐の風をいたみふる言の葉をかき予あつむる
題 玄らす 小町があね
世中を厭ひてあまの住かたもうさきめのみこそ見ぬ渡りけれ
昔あひ知りて侍りける人のうちに侍らひけるがもとに
遣ひしける 伊 勢
山川の音にのみさく百敷をみをはやあがら見るよしもがあ
人の忘れたりとさく女のもとに遣はしける

いかにやいかに
やさ問ふあるぞ
いへるなり

細い絶ぬとも
糸の縁にていへ
るなり

よの中いかにやいかに風の音をさくにも今ハ物や悲しき
かへし 伊 勢
世中いさともいさや風の音ハ秋にあきそふ心地こそすれ
題 玄らす 讀人 玄らす
たどへくる露と等しき身にしわれハ我思ひにも消んとやする
つらかりける男のはらからのもとに遣ひしける
さゝがにの空にすがける糸よりも心細しやたぬぬと思へハ
かへし
風ふけハ絶ぬと見ゆる蜘蛛のいも又かきつかでやむとやのさく
伏見といふ處にて
名に立てふしみの里といふ事ハ紅葉をどこに玄けハ也けり
題 玄らす 均子内親王

こよみひびきの
の意也

我もおもふ人も忘るるありそ海のうら吹風のやむ時もあく

山田法師

足引の山下とよみあく鳥もわがこどたねを物おもふらめや

神無月のついたら頃めのみそか男したりけるを見つけ

ていひあせしてつとめて 讀人あらず

今いどてあきはてられし身あれども霧立人をえやの忘るゝ

十月ばかり昔面白かりし所あればとて北山のやどり

これかれ遊び侍りけるついでに 兼輔朝臣

思ひ出てきつるもあくるくもみぢ葉の色の昔に變らざりけり

おあじ心を 坂上是則

峯高み行ても見べきもみぢ葉を我ぬあがらもかざしつる哉

去のすばかりにあづまよりまでさける男のもどより京

にあひ知りて侍りける女の許に正月ついたらちまで音づ

あきけてハ厭果
に秋はてをわれ
たり

色ハ昔に變らす
さいふに所ハ昔
のさましなくな
りたれさの意を
ふくみたり

まつ人ハ云々我
まつ人ハあつま
より來れりさ開
けと我方にハさ
りハせ待たさ來
る年のみ逢たさ
關を越てきたり
し事よさなり

れを侍りけれバ

讀人しらせ

まつ人のきぬとさけどもあらずの年のみこゆるあふ坂の關

離別 羈旅 一本離別歌あり

みちのくにへまかりける人に火うちを遣ひすどてかき
つげゝる
折々ばうちてたく火の煙あらば心さすがを去のべと思ふ
わひ知りて侍りける人の東の方へまかりけるに櫻の花
のかたに幣をして遣ひしける 讀人しらせ
あだ人の手向にをれる櫻花あふ坂までのちらせもあらせん
遠くまかりける人に餞し侍りける時にて
橋 直 袴
おもひやる心ばかりいさゝらじをなにへだつらん峯の白雲
下野にまかりける女に鏡にそへてつかひしける
讀人あらせ

後撰和歌集卷第十九

離別 羈旅

みちのくにへまかりける人に火うちを遣ひすどてかき
つげゝる
折々ばうちてたく火の煙あらば心さすがを去のべと思ふ
わひ知りて侍りける人の東の方へまかりけるに櫻の花
のかたに幣をして遣ひしける 讀人しらせ
あだ人の手向にをれる櫻花あふ坂までのちらせもあらせん
遠くまかりける人に餞し侍りける時にて
橋 直 袴
おもひやる心ばかりいさゝらじをなにへだつらん峯の白雲
下野にまかりける女に鏡にそへてつかひしける
讀人あらせ

二子山 下野也

富士の煙の我名
を駿河のいへ
おくるたき物な
よそへいへる也

このたびは此皮
に旅なかけたり

打捨ての二三句
往いたを三葉の露
にひかけてる也
まかりける人
にまかりける
にまかりける
へる也

ふたで山共にこえねをます鏡そこある影をたぐへて予やる
信濃へまかりける人にたき物つかひすどて

す る が

信濃ある淺間の山ももゆかればふじの煙のかひやあからん
遠き國へまかりける友達に火うちをそへて遣ひしける

讀人あらせ

このたびも我を忘れぬ物ならば打みんたびにおもひ出せん
京に侍りける女子をいかかる事か侍りけん心うしどて
留め置て因幡國へまかりければ

む す め

打すて、君しいなばの露の身の消ぬばかり予ありと頼む
伊勢へまかりける人どくいあんと心もとあがると聞て
旅の調度あせとらする物からた、う紙にかきてとらす
る名をばらまといひけるに

に枯れゆく離行
る也

不破の關ハ美濃
國不破郡にあり

一身をわくる云々
にわたつて京に
ままたひかくも
影にかりたけれ
やるさなりそへ
初雁の云々物
ひ初雁の問もなき
男の旅の人もなき
なして此度の立
る故に云々のよみ

をしと思ふ心のまくて此たびのゆく馬に鞭をおせつる哉
かへし

君が手をかれゆく秋の末にしも野飼に放つらまぞかきしき
同じ家に久しう侍りける女の美濃の國に親の侍りける
とぶらひにまかりけるに
藤原 清正

今のとて立かへりゆくふる里のふの關路にみやこ忘るを
遠き國にまかりける人に旅の具つかひしける鏡の箱の
うらにかきつけて遣ひしける
大窪 則善

身をわくることの難さにます鏡影ばかりをぞ君にそへつる
此たびのいでたちかん物うく覺ゆるといひければ
讀人 玄らす

はつ雁の我も空をるをぞかれバ君も物うき旅にやあるらん
あひまりて侍りける女の人の國にまかりけるにつらひ

て聞くりたる歌

いとせめて云々
古今戀二にい
はうは玉のし
衣をはかへし
さるさあるし
度の別ハ切に
しき入の切に
れハ近々の間
うりハ早くる
かくるハ人あ
旅路をいふに
へする事さ衣
にゆめ事さ衣
に度事さ衣

いつハ何時に伊
豆をそへたり
そむかれぬの歌
伊勢集にのれ
れたる人によめ
るにたかへしめ
伊勢のよめり也

しける 公忠 朝臣

いとせめて戀しきたびのから衣程あくかへす人もあらなん
かへし 女

から衣たつ日をよそにさく人のかへすばかりの程も戀じを
三月ばかりこしの國へまかりける人に酒たうべけるつ
いでよ 讀人 玄らす

戀しくのこどづてもせん歸るさの雁がねのまづ我宿にかけ
善祐法師の伊豆國に流され侍りけるに
伊 勢

別れていつあひみんもおもふらん限あるよの命ともあし
題 玄らす 讀人 玄らす
そむかれぬ松の千年の程よりもどもどだに慕われせし
かへし

おりの給ふ御
位をたりさせ給
ふ也弘徽殿の清
涼殿の北にあり

新給の源氏梅の
枝に手紙の
な思ひのたまへ
けさのたまく
榮花のやうく
繪巻に弘高の
給いきたる草子
になどみえて
手歌水手なご
のうきさまあり
しなり
道の雲にみち
のくを隠したり

涙川伊勢一志郡
にあり

君をのみ抄云信
夫里の津山奥州
そへて君を忍ぶ
のふに逢ふ事
はるけきかな
やとそへてな
逢にそへてな

ともくどまたふ涙のそふ水のいかある色に見えて行らん
亭子院のみかどかりる給うける年の秋弘徽殿のかべに
かきつけゝる
伊 勢

別るれどあひもをしまぬ百敷を見ざらんことの何か悲しき
帝御覽じて御かへし

身一つにあらぬばかりをおしなべて行めぐりてもさどか見ざらん

みちのくにへまかりける人に扇てうじて歌繪にかゝせ

侍りける 讀人 玄 らす

別れゆく道のくもるにちりゆけばとまる心も空にこそあれ

宗子の朝臣のむすめみちのくにへ下りけるに

いかで猶笠取山に身をちして露けきたびにそいんどぞ思ふ

かへし

笠どりの山とたのみし君をおきて涙の雨にぬれつゝせ行く

をどこの伊勢の國へまかりけるよ

君が行く方にありてふきみだ川まづの袖にぞ流るべらさる

旅にまかりける人に装束遣はすとて添てつかいしける

袖ぬれて別はすともから衣ゆくとなひひそきたりとをみん

かへし

わかれぢの心もゆかずから衣きてのきみだぞ先にたちける

旅ままかりける人に扇つかいすとて

そへてやる扇の風し心あらばわが思ふ人の手をちはされそ

友則がむすめのみちのくにへまかりけるに遣はしける

藤原滋勝が女

君をのみまのふの里へ行ものをあひづの山の遙けきやなど

つくしへまかるとときよいこの命婦におくりける

小野好古朝臣

これれい出羽の國なるへし

いやしき名取て抄に左遷にやさみゆ

ぬさ心さすて一本になしこれよろし
敦賀山にも越前の名所あり

五幡も越前の地名なり

としをへてあひみる人の別にいをしきものこそ命ありけれ
出羽よりのぼりけるにこれかれ馬のはちむけしけるに
かひらけどりて
源 濟

行ささ 知らぬ涙の悲しきためたゆめのまへに落るかりけり
平高遠がいやしき名とりて人の國へまかりけるよわす
るさといへりければ高遠が妻のいへる
忘るさといふにながる、涙川うき名をすく瀬ともあらあん
あひまりて侍りける人のあからさまにこしの國へまか
りけるにぬさ心さすて
讀人 志らす

我をのみ思ひつるがのこしならべかへるの山ま惑まざらまし
かへし

君をのみいつはたと思ひこしければ往來ゆきの道みちの遙けからじを
秋旅にまかりける人にぬさをみちの枝につけてつか

いしける

秋深く旅ゆく人のたむけにいもみちにまさる幣あかりけり

西四條の齋宮の九月晦日くだり侍りけるともある人に
ぬさつかひすて
大 輔

もみち葉を幣とちらしてたむけつ、秋と共にや行んとす覽
物へまかりける人に遣いしける
伊 勢

待わびて戀しくあらば尋ぬべくあどさき浪の上からでゆけ
題 志らす
贈 太政大臣

こんと云て別る、だにもある物をまられぬ今朝のまえて佗しき
かへし
伊 勢

さらばよと別れし時にいませば我も涙におぼれあまし
讀人 志らす

春霞はかちく立てわかるとも風よりやかにたれかどふべき

西四條齋宮一代
要記に延喜皇女
雅子内親王伊平
元子二川為伊勢
齋宮さみの
しみち葉の歌
九月晦日なれい
秋と共にやさい
へる也

こんと云て一
本今ほさてさあ
り
まられぬけさ家
集にハ時雨る、
今日のごあり

春霞の贈答さ
に戀五に出たり

かへし

伊

勢

めに見えぬ風に心をたぐへつゝやらば霞のへだてこそせめ
甲斐へまかりける人につかひしける

君が代いつるの郡におえてきね定^まき世のうたがひもさく
舟にて物へまかりける人に遣ひしける

後^おれず予心にのりてこがるべき涙にもとめよ舟みえずとも
かへし 讀人まらず

舟さくば天の川までもどめてんこぎつゝ沙の中にきえずの
舟にて物へまかりける人

かねてより涙ぞ袖を打ぬらす浮べる舟にのらんどおもへば
かへし 伊 勢

おさへつゝ我の袖にぞせきとむる舟こそ沙にささじと思へば
遠き所にまかるとして女の許へつかひしける

君が代はは君か
あつてはあや
しあつてはあや
かりてはあや
同し未旬はあや
たひに甲斐を兼
たるなるへし

舟なくは一本舟
ならはまあり

涙そに波なそへ
たり

大はつせ川契沖あ
らす遠江にあり
にや三河國にあり
郡谷部郷此所海
此に大和の初瀬
邊に住所ありて
京に召さるて其
所なるを遠江へ
めり直なるを遠江へ
の地名のみ遠江へ
いひこちの道江
國の遠き道の江
誤歎さいへり

貫 之

忘れじとことに結びて別るればあひみんまでの思ひ乱るさ

羈旅歌

ある人いやしき名とりて遠江國へまかるとてはつせ川
を渡るとてよみ侍りける 讀人まらず

はつせ川渡る瀬さへや濁るらんよにすみ難き我身と思へば
たのれ嶋をみて

名にしふいゝあだにぞ思ふたのれ嶋浪の濡衣^{ぬれぎぬ}いく世きつ覽
東^{あづま}へまかりけるにすぎぬる方戀しく覺えける程に川を

渡りけるに浪の立けるを見て 業平 朝臣
いとしく過にし方の戀しきにうらやましくもかへる浪哉

白山へまうでけるに道中よりたよりの人につけてつか
ひしける 讀人まらず

ふりくるは開け
來りしはふたへ
密の縁にいて
る也下句は行
難きかけたる
中遠にけり歌
よし道の透る
よしにいへる
也

みしる衣此
にて身代を
の意を裏代
の名の美流
のさる白絹
そ三つなひ
へたるなり
意

みやこまで音にふりくる白山のゆきつきがたき所なりけり
中原宗興が美濃國へまかり下り侍りける道に女の家
宿りていひつきてさりがたく覺えければ二三日侍りて
やんごとなき事によりてまかり立ければきぬを包みて
それが上にかきて送りける
中原宗興
山里のくさばの露のまげからんみのしろ衣ぬはずともきよ
土佐よりまかりのぼりける舟のうちにて見侍りけるに
山ののちらで月の浪の中より出るやうにみえければ昔
安倍仲麿がもろこしにてふりさけみればといへること
をれもひやりて
貫之
みやこにて山の端にみし月を海より出て海よこそいれ
法皇宮の瀧といふ所御覽じける御供にて

菅原右大臣

日暮の山大和吉野郡にあり

旅さなりな家
集にありしな
宇治殿抄云融公
別業今平等院其
地也
うちこのさし
ハ内の外のさし
に宇治の殿を隠
しれたる也

みづひきの白糸はへておるはたを旅の衣にたちやかさねん
道まかりけるついでにひぐらしの山をまかり侍りて
日ぐらしの山路を暗みさ夜更て木の末毎にもみぢてらせる
初瀬へ詣つて山のべといふまたりにてよみ侍りける
伊勢
草枕たびどきりあは山のべにまらくもあらぬわれや宿らん
宇治の殿といふ所を
水もせに浮ぬる時なまがらみのうちのとのともみえぬもみぢ葉
海のはどりにてこれかれ逍遙し侍りけるついでに
小町
花さきてみならぬ物なわたづみのかざしにさせる沖つ白浪
東ある人の許へまかりける道に相摸の足柄の關にて女
の京にまかり上りけるにあひて
眞靜法師

旅のやさりし給
うてハ京近まで
歸らせ給へども
未京へハいせ
給はて御旅宿に
はしましけるな
るへし歌の意に
ても未京のハ入
らせ給ハぬ問の
事さ問也

草枕の歌御山路
の折なき長き御
旅路にわひさせ
給へる時の事な
るへし
いつしに鹿を
いひかけたる歌
思ひにも出たり
秋そ一本笠そと
あり

おきかへりつ
ハ濡るハ上ハぬ
れそふ意なり

秋山の歌法師
の山色に秋の
心あるを厭ふさ
まによみなされ
たるなるへしと
強麗いへり

あしがらの關の山路を行人のまゐるもまらぬもうとからぬ哉
法皇遠き所に山ふみま給うて京に歸り給ふに旅のやど
りま給うて御供にさぶらふ道俗に歌よませ給うけるに

僧 正 聖 寶

八ごどにけふくどのみこひらるゝ都近くもありにける哉
土佐より任はてゝのぼり侍りけるに舟の中にて月を見
て

貫 之

てる月の流るゝ見れば天の川出るみさどの海にぞありける

題 志 らす

亭子院御製

草枕もみぢむしろにかへたらば心をくだくものあらましや
京に思ふ人侍りて遠き所よりかへりまうでさける道に
といまりて九月ばかりに

讀 人 志 らす

思ふ人ありてかへればいつしかのつまつ待つ露の秋を悲しき

草枕ゆふ手ばかりのちにあれやつゆも涙もあきかへりつゝ
宮のたきといふ所に法皇おのしまたりけるにおやせ
ごどありて

素 性 法 師

秋山にまどふ心をみやたきの瀧のまら淋にけちやはてゝん

一本にハ哀傷の
二字なし

女八のみこハ延
喜親王の北方也
元良親王ハ陽成
第一の皇子三品
兵部卿なり
典侍明子の仲平
公の女なり

つまんハ積んに
積をそへてなり
賀を祝ひて人に
と菜を贈れる折
なまの歌なるへ
し
章明親王ハ醍醐
の皇子なり

後撰和歌集卷第三十

賀歌 哀傷

女八のみこ元良親王のために四十の賀し侍りけるに菊
の花をかざしにをりて

藤原伊衡朝臣

萬代の霜にもかれぬ白菊をうしろやすくもかざしつるかな
典侍あきらけいこ父の宰相のために賀し侍りけるに玄
朝法師の裳唐衣ぬひてつかひしけれバ

典侍あきらけいこ

雲わくるあまの羽衣打きてハ君がちとせにわハざらめやハ
題まらす

大政大臣

今年より若菜にそへて老の世に嬉し事をつまんどぞ思ふ
章明親王かうぶりしける日あそびし侍りけるに右大臣
これかれ歌よませ侍りけるに

貫之

ここの音も竹もちとせの聲するハ人の思もかよふありけり
賀のやうある事し侍りけるところにて

讀人まらす

百年と祝ふを我ハ聞かから思ふがためハわかずぞわりける
左大臣家のをのこ子女子かうぶりし裳着侍りけるに

貫之

大はらやをしはの山のこ松原はや木高かれ千代のかげみん
人のかうぶりする所にて藤の花をかざして

讀人まらす

打よするあみの花こそ咲にけれ千代まつ風や春になるらん
女の許につかひしける

君がため松の千年も盡ぬべしこれよりまさる神のよもが
年星おこあふとて女檀越のもとよりすゝをかりて侍り

檀越ハ舊譯の梵
語新譯ハ檀那也

左大臣ハ實賴公
なり裳着ハ女の
裳を着初るにて
男の元服をなす
に同じ
大原ハ大原ハ藤
原の祖神ハ春日
明神なれハ左大
臣の君遠な小大
の山のこ松原さ
よめるなり

百年に八歳を添
て八念珠の敷
の如く皇祭に
の命を添て祈
八年を添て祈
たる験を君見
此給ふへきそ
けふそく賜延又
賜息もかけり
今上ハ村上天皇
より帥ハそちさ
よむへし

道遠くともハ聖
人の道深遠なり
さとの意也

ければ加へてつかひしける
惟 濟 法師
百年にやとせをそへて祈りける玉のまを君みざらめや
左大臣の家にけふそく心ざしおくるとてくへける

僧 都 仁 致

けふそくをおさへてまさへ萬世に花のさかりを心まづかに
今上帥のみこと聞えし時太政大臣の家にわたりおひし
まして歸らせ給ふ御おくりものに御本奉るとて

太 政 大 臣

君が爲いのふ心の深ければひぢりの御代のあどあらへとぞ
御かへし
今上 御 製
敷へおくことたかひずり行末の道遠くともあどいまどい
今上梅壺におひしまし、時たき木こらせて奉り給ける
山人のこれるたき木の君が爲おはくの年とつまんどぞ思ふ

重落に小附さ
ふハ古き詠る
へし万葉五にも
ますハ重き
馬荷にうハ荷う
つさいふ事のご
と云々さみねた
り

院ハ朱菴院なり
宮ハ昌子女王に
やいしげハ若
笥なり

西四條のみこハ
雅子内親王女四
みこハ勅子内親
王を云共延喜
の皇女なり
右大臣ハ師輔公
なり

御かへし

御 製

年の敷つまんとすなる重荷にいとこづけをこりも添そかん
東宮の御前にくれ竹うゑさせたまひけるに

清 正

君がため移してうゑる呉竹にちよもこもれる心地こそすれ

院の殿上にてみやの御かたより基盤いださせ給ひける

命 婦 清 子

笥のえのくちんもえらす君がよのつさん限り打こゝろみよ

西四條のみこの家の山にて女四のみこのもとに

右 大 臣

あみたてる松の縁の枝わかずをりつゝ千代を誰どかみん

十二月斗にかうぶりする所にて 貫 之

祝ふ事ありとあるべし今日されと年のこあたに春もきにけり

哀傷歌

敦敏が身まがりにはけるをまださかであづまより馬を送りて侍りければ
左大臣

まだえらぬ人もありけり東路に我も行てぞすむべかりける
兄のふくにて一條にまかりて
太政大臣

春の夜の夢のうちにも思ひさや君あき宿をゆきてみんどの
かへし

宿みればねてもさめても戀しくて夢現ともわかれざりけり
先帝おのしまさで後世を思ひあけさてつかひしける
三條右大臣

はかなくて世にふるよりの山階の宮の草木とあらまし物を
かへし
兼輔朝臣

山玄寺の宮の草木と君あらば我のまづくにぬるばかりあり

敦敏朝臣の祿人
右少將にて天曆
元年に卒す作者
左大臣實頼公の
息なり
また知らぬの歌
いさばかりなく思
ふまゝにのみ給
はれるさくあり
宿みれはの歌作
者なしといひと
河社にも束緒に
もみえたるさる
事也一本にさあ
り今思ふに小一
條の家女房な
さなるへしと新
抄にのみ
先帝の延喜帝也

女四のみこの勤
子内親王右大臣
師輔公の北方な
り

いたみは名に
形見をかねた
子に籠をかねた
に結句一本子だ
に残らぬさあり

この世を多
くの世の事な也

時望朝臣みまがりて後はての頃近くありて人の許より
いかに思ふらんといひおこせたりければ

時望朝臣妻

別れにし程をはてどもおもはえず戀しきことの限あければ
女四のみこの文の侍りけるにかきつけて内侍のかみに
おくり侍りける
右大臣

種もあき花だにちらぬ宿もあるをさどかかたみのこだにさからん
かへし
内侍のかみ

結び置し種あらねども見るからにいと忍ぶの草をつむ哉
女四のみこの事とぶらひ侍るとして伊勢

こゝら世をさくが中にも悲しき人の涙もつきやまぬらん
かへし
讀人まらさ

さく人もあひれてふさる別にいと涙づつさせざりける

女四のみこのかくれ侍りにける時

右大臣

きのふまで千代と契りし君をわが去での山路に尋ねべき哉
先坊うせ給ひての春大輔につかひしける

玄上朝臣女

あらずの年こえつらしつねもあきはつ鶯のねにぞあかるゝ

大輔

ねにたてゝあかぬ日あし鶯のむかしの春を思ひやりつゝ

玄上朝臣女

諸共におさゝし秋の露ばかりかゝらん物とおもひかけきや

清正が枇杷大臣のいみにこもりて侍りけるにつかひし

藤原守文

よの中の悲しきことをさくのうへにかく白露を涙あけける

先坊の先此坊の宮
をいふ此先坊の宮
文彦の可なるへ
し返歌の作者大
輔の御乳母なれ
はなり

思ひやりつゝ一
本思ひ出つゝ一
ある方まさりさ
まにわほ

枇杷大臣の仲平
公なり

菊に聞そへた

かへし

清正

さくにだに露けかるらん人のよをめにみし袖を思ひやらあん
兼輔朝臣あかりて後土佐の國よりまかりのぼりて彼

栗田の家にて

貫之

植あさし二葉の松のわりあがら君がちとせのあきぞ悲しき

其ついでにかしこある人

君まさでとしのへぬれを故郷につきせぬもの涙なりけり

人のとぶらひにまうでさたりけるに早くあかりに

といひ侍りければ楓の紅葉にかきつけ侍りける

戒仙法師

過にける人を秋しもとふからに袖もみぢの色にこそあれ

あかりて侍りける人のいみにこもりて侍りけるに雨

のふる日人のとひて侍りければ 誰人あらず

兼輔朝臣の左中
將利基の息が平
三年に薨す
栗田の家高松の
事殊に名高くや
ありけり上雑一
みは貫之集に
かたり

袖の紅葉の色に
なるこの例の紅
涙の事なり此紅
葉の如き色にさ
いふ事なり

故郷に一本ふる
ささのさあり又
まらさあり人
さつさあり
敦忠朝臣の時平
公の息にて従
位権中納言大
六年三月薨す
をのハ小野なる
へし
方やいつれそ一
木方いつれそ
さあり

崩衣に淵をかれ
たり花し一本色
しとあり

袖かわく時奇かりける我身にふるを雨とも思ひざりけり
人のいみはてゝもとの家にかへりける日

故郷よ君のいづらとまちどいつれの空の霞といひまし
敦忠朝臣みまがりて又の年かの朝臣のをのさる家みん
とてこれかれまかりて物語し侍りけるついでによみ侍
りける

清 正

君がいにし方やいづれぞ白雲のぬしき宿と見るぞ悲しき
親のわざしに寺に詣でたりけるを聞つけて諸共にすら
でましものをと人のいひければ 讀人まらす
わび人のたもとに君がうつりせば藤の花とぞ色のみえまし
かへし

よそにをる袖だにひぢしふぢ衣涙に花も見えずぞあらまし
題まらす

伊 勢

玄上朝臣女大鏡
卷二に中將御息
所とあり
さめお問ハ大鏡
りに君ハさハとあ

こん年存のに戦
春をかけたり
鶴ハ殊に雌雄の
中物なる事新抄
き物なる事新抄
に委しくいはれ
たるをみるへし

程もさく誰も後れぬ世あれどもとまるの行を悲しとぞみる
人をなくさして限なく戀て思ひいりてねたる夜の夢に
みえければ思ひける人にかくなんといひつかのしたり
ければ
玄上朝臣女
時のまもなぐさめつらん 覺ぬまの夢にだに見ぬ我を悲しき
かへし
大 輔

悲しさの慰むべくもあらざりつ夢のうちにも夢と見ゆれば
在原哉春がみまがりけるをさゝて

伊 勢

かけてだに我身の上と思ひきやこんとし春の花を見じとハ
一つがひ侍りける鶴の一つがなくさりにければとまれ
るがいたくさき侍りければ雨のふり侍りけるに
さく聲にそひて涙のぼらねとくもの上より雨とふるらん

ふることいふこと
の身まかりし人
の事をいひける
なるへしきつかる
れ緒にみせ

妻のみまがりての年の去りすのつごもりの日ふること
いひ侍りけるに
兼 輔 朝 臣

なき人の共にしかへる年あらば暮ゆく今日嬉しからまし
かへし
貫 之

こふるまに年のくれきバあき人の別やいと遠くありあ

後撰和歌集終

佐々木弘綱
佐々木信綱
標註

元輔家集
能宣家集

東京 博文館藏版

紅葉合左右方を
分ち紅葉を合せ
勝劣を争ふわさ
にて菊合女郎花
合葛蒲根合なご
皆此頃行はれた
り
わか思普本思ひ
やるごあり
くらふの山山城
紀伊郡にあり
ふふくろのつもと
袋の餌をいり
袋に用ひしなれ
まの物にひさまさ
まの物にひさまさ
やうになりたり
ちらぬにをさか
ねに過ぬて不覽
を一本にあり

元輔集

佐々木弘綱

同 信綱 標註

村上の御時に紅葉合殿上人にせさせ給ふに
わが思くらぶの山のもみぢ葉におとらぬもの心ありけり
梨壺にへい内侍のすみ侍りけるにさうじのへだてのか
みより餌袋に物いれて藤の花してゆひてうちこして侍
りしに
立かへり見れどもわかず春風のなごりにこゆる藤きみの花
三月盡
風はやみよしの、山の櫻花ちらぬにはるのすぎぬてふらん
藏人所のそのごとも川原にすいみしにまかりたりしに

元輔集

色もなき哉を色もなきさの枝をかつたをさ一本にあり

年ごとに毎年除目にもるいを歎く悲憤なり櫻の花を惜むの下心をよみ侍りけるさ替本にあり

くにかい一本くにもちかきあり

吹かせのすいしかりけり草まげみ露のいたらぬ萩の下葉も
同じ御時の菊合に

たとふべき色もあさかき菊の花枝をわきてや露もおくらん
つかさ給へらで又の日左近藏人のもとにつかひし侍る

年毎に絶ぬ涙やつもりつゝいとふかくの身をまづむらん
小野宮の太政大臣の家の池のやとりにて櫻の花を惜む

櫻花そこあるかげぞ惜まるゝまづめる人の春かとおもへば
藏人所の櫻の花のちるを見てつかさ給へるべき年の春

給へらで
櫻こそ雪と散れれまぐれつゝ春ともまらですごしつるかあ

小野宮の太政大臣月輪寺に櫻の花みにおひしたりしに
たがためかあすの残さん山櫻こぼれて匂へ今日のかたみに

梨壺の櫻のはち盛かりけるにくにちか歌よみてつけて

侍りける後に聞てよみて侍りし

花櫻おもひやりてもたへぬ哉あかずちりけん折のこゝろを

藏人所まかり離れては藏人の役をやめて後なり

藏人所まかりはあれて後あしつばにてをのこども雨ふ
る日さけたうべしついでにともだちにあひて侍るよし

いそのかみふりさいふ枕詞なり

いそのかみふりにし人にあふ時の嬉しかりけり夏のよの雨
冷泉院の池のやとりにて藏人所のをのこども櫻をしみ

侍るにまかりあひて

いにしへのなごりあるべし池水に移れる花の涙とみゆるの

天徳は村上天皇の年説なり

天徳三年二月三日權大納言源朝臣舟にて八幡詣し侍る
に道にて人々のおもはん事をいへど侍りしに

わたし守君にみあれて老にけり雲井のきしにまどふべき哉
またの年の十月に同じ大納言の家にてこれる菊を惜み

残せる昔本残れ
るさあり

年へぬる菊のみ
つからの年老た
るによそへいへ
るなり

侍りて

長き夜のはしかとも見よ初霜のおきて残せるまらぎくの花
同じ大納言の家に菊をもてまかりてよみて侍る

霜ふかく成ゆく年になかれけるまがきにおいて年へぬる菊
同じ大納言菊惜む曉に紅葉をらせてよみ侍りし

夜もすがら残れる菊ををしむとも紅葉の色も忘れざらなん
かへしに

忘れめや深き紅葉のかげならで移ろふ菊のあらば社ミヤあらめ
小野宮太政大臣花宴乞給ふ日浪をへだてて花をみると

いふ題

岸ちかみ浪のへだつる花の色折てだにこそみるをせにせめ
また

遠近の岸をバ浪のへだつれせかよふ花の色にぞありける

ちひさき人昔本
ちひさき子とあ
り振なごのもさ
にこそせたるな
るへし

頼みける昔本頼
みくるさあり
千尋の浪伊勢又
紀伊にあれとこ
てもあるべし

天祿は圓融天皇
の年號なり昔本
には天徳さあり
よしたか昔本よ
しちかさあり

二月昔本六月さ
あり一本には八
月さあり

ちひさき人の許に貝をおこせて侍りし人に

ゆくさを心もとなく頼みけるちひろの濱のかひを嬉しき
またあまびこのすにかひをいれて同じ人におこせて侍
りしに

虫のねのよるともまらでうつせ貝思ひぬかたに求めける哉

天祿二年正月比叡によしたかの少將のぼりて鶯の聲心
もとあきよしよめと侍りしに

鶯の音のうちとけて足ひきの山のゆきこそまたきえにけれ
小野宮太政大臣さが野に花みにまかりて侍りしに

秋の野の萩のにしきを故郷に鹿の音あがらうつしてしが奇
天徳四年二月四日の夜大納言右大將藤原朝臣あき月の

わかきに昔を戀ふる心人々よみ侍りしに
天のはら月のかへらぬ空あがらありし昔のよをやこふらん

布引寺普本不門
寺あり

秋の色普本秋の
花あり

見せよ一本のみ
よさあり

いかにばかり俗に
意に五十日なそ
へたり

外のためしに普
本外のためしに
さあり

わりと和名抄に
破子さかけり今
辨當箱といふに
近じ
待つかひに松を
そへたり

ひく人もの歌表
はた子日の歌
なれさ哀の意は
引上る人もなく
年を経る吉野の
松の子日なかり
也さ歎きしなり
みよしの身を
そへて深山ふれ
はいへり

宮内卿もとさか八十賀にやがて法師になりて布引寺と
いふ所にこもりて侍りしに

夜をふかみ松にゆづりて歸る哉浮世をそむくほどの遠さに

天徳二年八月廿四日白川院に大納言源朝臣秋の色露を

帯て開くといふ題を右大將藤原朝臣なごまかりあひて

ろころびて花咲にけり藤袴にやひをむすぶつゆにまかせて

安和二年二月五日一條のおやいまうち君白河院にて子

日し侍りしに

若菜つむ子日の松の千世のかけすみつゝ見せよ玄ら河の水

ありひらの左大臣八十の賀あせちの更衣のし侍りしに

わかさの歌

春毎に若菜つみてぞいのるべきをしほのかひに色ふかき松

大將の子のいか子日にあたりて侍りしに

二葉ある子日の松をいかにばかり行末とやきものにはたとへん

小野宮太政大臣の家にて子日し侍りしに

千年へんやとの子日の松をこそ外もためしにひかんとすらめ

内の女房ども子日しにまかり出んとて侍りけるに中宮

のさやみ給ひて俄にとまりにければまうけて侍りける

わりごつつかいすどて

春霞ねの日の野邊にたち出ねばまつかひあくて暮しつる哉

つかさめしの子日にあたりて侍りしにあせちの更衣の

局つばねより松をはしにて物出して侍りしに

ひく人もあくて年ふるみよしの、松の子日をよそにこそきけ

式部卿親王の子日の日人々にかりてよみて侍る

船岡に若菜つみつゝ君がためねの日の松の千世をおくらん

子日する松の千年の春ごととに若菜のつまん野邊のまに

安和の冷泉天皇
の年號なり
實資の小野宮太
政大臣實賴公の
孫なりされと養
ひて子とし給へ
り

かへれは普本歸
らんあり残る
らんかしの下に
されは此枝を折
てまわらするそ
さいふ意をふく
めたり
おひひかばあま
おひかばはるま
ま普本にあり

いく世普本いく
らとあり
もの洲瀨もの
し三字一本にな
し

君もろさもに云
々普本君と共
しおひんとすれ
はとあり

かつま普本まつ
まとあり

進はしけるの下
にまあり
ひさりすたてん
普本すたんと
あるはるしか
らす

安和二年二月五日左中將實資の朝臣小野宮の太政大臣の子日玄に遣ひしけるによみて侍る

老の世にかゝる子日ありきやと木高き嶺の松にとはしや

女房の車に梅の花折てつかひすとて

松をのみひきてかへれば梅のはさおもふ心の残るらんかし

人にかはりて

萬代の春のねの日に出てみん松のいくたびおひにかはると

天祿三年二月三日一條の太政大臣齋院にて子日し侍り

し日庭の松をもてあそぶといふ題を

千早振いつきの宮の庭の松いく世の千代をもとめかぞへん

其日齋院のお前のものゝすのまに鶴小松舟などあるに

つみて送れあまのつり舟棹さして松の千年も鶴のよはひも

大貳くにのりが女の賀し侍りしに

二葉さる松のひかすとおもふらん千年の春の今日に残すを
又

けふよりの二葉の松ぞむつまじき君諸共にかいんとすれば

周防に侍し時岩に生たる小松を人のもてきて侍りしに

萬代に千年をそへてみつる哉いはさながらにひける小松の

植てみんちとせの春の今日毎に子日の松にかゝりけりとも

すのうあるかつまのうまやといふ所にてねの日し侍り

しに

おもひいでよ千年の春のけふ毎にかつまの浦の岸のひめ松

ある人のはらめるはせにその父身まがりて後うまれて

侍る七日の夜につかはしける

千世をへんかたみともみよ忍びつゝ一人すだてん鶴の毛衣

左中將さねすけの朝臣子らませて侍りし七日の夜

嶺尊本種さあり

千世をそおかん
ハ千年までな
らへんさなり

加茂祭ハ四月中
酉日なり

千年とハ普本千
させなハさあり
やふ障ハ結ふの
枕詞ハから祭の
日に人々のハく
る物なれハいへ

巢立もへき普
本拾遺集さもに
すたてらるへき
さあり鶴のひな
ハ千年ふるもの
なれハ生れハる
を比ハしハる也

頭ハ少將普本頭
中將さあり

宰相ハ參議の唐
名なり

雲井ハ中ハヤミ
あり
影そはるらん普
本影そ添らん普
ありすハてハか
るハ一字ハ何ハ
のハ一字ハ何ハ
なれハ一字ハ何
てハ一字ハ何ハ
れハ一字ハ何ハ
つくる也ハ事ハ
のハ一字ハ何ハ

をしは山いかなる嶺の松あれバ千世を一夜にちして生らん
九月九日人のうまれて侍るに七日にあたりて侍るに
時しもあれ今日のけふにしあひぬれバ千世をぞおかん菊の白露
人の装きしに

千年ふる松に玉もぞかゝるべきおきつ白浪たちかへりつゝ
たかときが子の加茂の祭の日袴着し侍りしに

千年とは我ちらねどもゆふだすきむすぶの神も祈りかくらん
冷泉院の御めのとこの七夜よみて侍る

たらちねも皆ちがらへて住吉の二葉の松の千代をこそみめ
ながきよがうまれて侍りし七日の夜

松がえのかよへる枝をどぐらにて巢立もるべき鶴のひさ哉
人の装き侍るに

萬代をちがらの濱のさいれ石の今宵よりこそ苔もむすらめ

是もまた人の装き侍りしに

住吉の浦の玉もをむすびあげて渚のまつのおげをこそみめ

頭ハ少將あつとしが子うませて侍る七日の夜

姫小松大原山のたねあれバ千とせハたいにまかせてをみん

人の装き侍るに

玉藻よる岩々のやどに成にけりちがらの浦の濱のまさごハ

宰相もどすけの朝臣のうま子に袴させ侍りしに

はぐくみて君すだてすハ鶴の子の雲井ちがらや千世をし知まし

人の子うみたる七日の夜

たづの子の雲井にあそふ齡こそ空にまらるゝ物にハ有けれ

宰相もとすけの朝臣のむすめの装き侍りしに

結びあぐる君が玉もの光にハさやけき月のかげそハるらん

清原のすけときが子うませたる七日の夜

疎からめ我中山
ハ元輔しすけ時
も共に清原氏に
て親しき中なれ
ハなり

こみはたしな
一本さみはたし
てんさあり

遙に予おもひやらるゝうとからぬ我中やまの松のすゑの世
紀の守ためみつがちひさき子を出してこれをいひて
歌よめといひ侍りしに
萬代をかどへんものなきの國のちひろの濱の眞砂ありけり
右大將藤原朝臣子うませて侍りし七日の夜さきそむる
梅といふ題をよみ侍りしに
さきそむる梅の花がさかす身うしろやすきを萬代の春
又の年またうませて侍るに
年毎に祈りしくればおもかれて珍らしげあき千世と社ミヤみれ
もとすけが子のとみはたどつけて侍りしに袴させ侍り
しを
世の中にことある事ゝあらずともどみはたしかん命長くて
大貳くにのりの朝臣うまごの五十日にありしにわりご

見てしかの意に
たき事よならん
てかけさにつけ
世のあさにつけ
て心得へし
てかれて普木かけ
てさあり

又後に云々の詞
世縁子の歌普本
世中にことなる
事はの歌の次に
ある方まされり
のるへき普本な
るへきさあり

行春の歌かほも
な物名にしたる
なり
あはばや普本に
あはばやさあり
古今春下に櫻花
春加はれる年た
し趣の歌なり同

てうじて歌を繪にかゝせ侍りし
みてしがあ二葉の松の生えげりやそうち人の影とあらん世
住の江の濱のまさごの苔ふりて巖とあらんほどをしぞ思ふ
松の苔千とせをかねて生えげれ鶴のかひこの巢とも成べく
また後に着せ侍りしに
縁子の千世ぞ常磐にいのらるゝのるべき山の松とみるく
かはもといふ所に
行春のをしむにとまる物あらば何かのものを人のおもはん
冷泉院にわたらせ給うて池のものと初雪といふ題を殿
上のをのこどもよみ侍りしにかりて
池ちかくふる初雪の名残に玉のうてあぞあらたまりける
五月ふたつある年庚申に人にかりて
五月雨の數くはゝれる年だにも山をとゞぎす聲にあかばや

たのまん普本か
さいんさあり

扇合云々拾遺集
のらんこのまけ
のらんに一品宮の
奉り給ひし由み
の歌も同じ

まけわさひ負た
る方より其間に
雲をなすを云

さみだれのあまりもまだし時鳥たゞ一聲にわけもこそすれ
うちの藤の花の宴に人にかりりて
も、しきにちびきてみゆる藤波のいく萬代の春をたのまん
つば前裁の宴せさせ給ふに人にかはりて
月かげのいたらぬ庭もこよひこそさやけかりけれ萩の白露
天祿四年七月七日一品宮の扇合にあやの文もんにあらせ給
ふとてよみ侍りし
天の河あふぎの風に霧はれて空すみわたるかさゝぎのはし
又扇合に人にかはりて
萬代の秋や玄のばんたあばたのあふぎの風のあざり久しく
村上の御時五月五日庚申をんあ方男方歌合せさせ給ふ
に男方勝にければ八月廿日にまけわざして糸を結べる
こに松虫鈴虫いれて女郎花につけて

くもに一本花に
さあり
分めを普本わか
ぬ一本さかぬ
なごあり
御前に普本おま
へのさあり

こころに別
々の意也

女郎花くもにかりりてはふ葛のまくとや思ふ露の分めを
千世をへてくる秋毎に聞えあん行末とはきまつむしのこゑ
うちの御前に紅梅を藏人どもによめとおはせらるゝに
かりりて
春雨やふりてそむらんくれあゐの色こくみゆる梅の花がさ
梅の花香のことくに句はねと薄くこくこそ花のさきけれ
くれあゐに色こき梅の鶯のあきそめしよりにほふあるべし
中務がある所にまかりたりしに貝をこに入て侍りしに
浪間なみ分みるかひあるの伊勢の海のいづれの方の名残成らん
かへし中務
いせの海は浪残だにちくあせにけり名のみ高しの濱と聞えて
又かへしつかひす
白波の昔をかけてきくからにまはみつ浦とちりぬべきかあ

雪深み一本雪ふ
りきさあり又四
句たか教ふるに
さあり

霞のなつ云々
一本霞のうら
花櫻さあり

まらん普本ま
づまるとあり

こひの森伊豆
にあり子を戀る
事によめり

つかさめしの頃過て雪のふりて侍りしに兼盛が許に遣
ひし、

雪ふかみこしのまら山我なれやたが教へしに春をまらん
中務がむすめの中納言清水に詣で、人に物いひ侍りし
を聞てつかひし、

にはふらん霞のをちの山櫻おもひやりてもをしまるゝかち
梅の花に雪の氷りつきて侍るを花か雪かど人のいひて
侍りしに

花を雪ゆきを花かと見てぞふるうめの氷のとけぬかぎりは
西の京に住侍りし人のとぬ心の歌よみて侍し返事に
草わかみむすびし萩のはにもいです西ある人や秋を知らん
順が子あくありて侍りしとぶらひにつかひし、

おもひやる子こひの森の華にひよそある人の袖もぬれけり

順がかへし

このし木下に
子をそへたり

歌に木をそへた
り

かる浦普本かる
らんさあり

花の陰の歌古今
集雑上に思ふこ
ちまさぬせる夜
ハ唐錦たいまく
なしき物にそ有
けるさあるなを
りてよめる世
貫之集を云々の
事後拾遺集に委
しくいふへし

栲はてゝあきこのもとに君がとふ言の葉みるも先予悲しき
又かへしつかひし、

おひたゝでかれぬと聞しこのもとのあけきの森といかで成けん
正月二日鶯の聞たりやど人のいひ侍りしに

年ごとに春のわするゝやどかれバ鶯のねもよきてきこえず
老たる人のあるとよりめをおこせて侍りしに

わたの原あさくも思ひやらぬ哉おいの涙わけみるめかる浦
櫻のちれる所にて

花のかげたゝまくをしきこよひ哉錦をさらす庭と見えつゝ
貫之集を人のかりて返し侍るにつかはし、
かへしけん昔の人の玉づさをきゝてぞそゝぐ老のあみだの
ある所に松虫鈴虫籠に入てひわりをなど添て侍りしに

萬代の秋をまちつゝきゝわたれいはやにねざす松虫のこゑ
四月一日とも時が有馬よりまうできて歸るに時鳥さん
あきしとかたりけれバ

春のをし時鳥はたきかまほしおもひわびぬるまづこゝろ哉
子に侍るものゝ若菜のやうある物して侍りしに

二葉にてみし面影もかゝらぬに若菜つみける今日にあふ哉
またかどに侍りしものゝして侍りしに

かりたちて若菜をいかでつませけん膝を離れし程もへさくに
加階まうし侍りしにえせで鶯のさくをきゝて

うぐひすのさくねばかりぞ聞えける春のいたらぬ人の宿に
みちすゑ同じごと加階をえま侍らでいかある花かまづ

ひひらくるさどやうある心をよみて侍りしかバ
おそくどくひらくる枝を花故に身をもうしどの何か思ひん

二葉にておきた
ちての歌二首さ
もに親の心さこ
そま推量られて
いさも哀深くな
ん

人の宿にはは我
宿に人の宿なり
普本人の宿にも
さありいつれに
てもさこゆる也

枝を普本枝のこ
あり

天の下に笠の縁
の雨をそへたり

盛ならぬに普本
盛ならぬに普本
りいつれにても
同し意なり
歸る雁の歌伊勢
物上にていぬへ
の秋風ふくこ
さありに告げこ
まなる趣なり

宰相中將の子うませて侍りし七日の夜梅の花を題にて
咲そむる梅の花笠いつよりかあめの下をばまらんとすらん
時文がめのなくなりて又の年の同じ頃いひおこせて侍る
年をへて馴こし人を別れにしこぞの今年の今日にぞ有ける
かへし

わかれけん心をくみて涙河おもひやるかあこぞの今日をも
菊の花のいとまろさにつけて時文

菊の花さかりの色の我身に白くなるさどわびしかるらん
かへしに

露のむく世をぞうらむる我身に盛の色のさかりあらぬに
小一條のねどいのさくさ侍りて後櫻のはさ面白さを
もてあそび侍る日歸る雁といふことを

かへる雁君もしあはれ故郷にさくら惜むとあきてつげさん

あかけれは昔本
清けれは結句空
そ戀しきさあり

はらけの元日
赤の賀の奏も
にほやけの例也
事毎年の恒例也
江次第に赤も
草み其腹赤を
りしなり
檢原霞みては
たらな隠しいは

年ふかきハ河の
縁詰にて長き間
つれそひ給ひし
の意なり

ある所にて月のおもしろきは昔の物語あとして
かくばかり秋の月かげあかければ曇りし冬の空やこひしき
大貳くにのり正月にはらかといふ物おこせて侍りしに
み吉野も若菜つむらんまきもこのひのらかすみて日頃へぬれば
同じ人のめしにて侍りし又の年遣ひし
月影をへだてしころの春霞みてながむらん今日のかきしさ
かねもりが駿河へまかりしにつかひし
えらざりき田子の浦あみ袖ひぢて老の別れにかゝる物とは
大貳くにのりの朝臣めのあきまりぬと聞てつくしへ遣
ひしける
年ふかき人にわかれの涙河そでのえがらみおもひこそやれ
同じくにのり秋風の夜寒あるよしよみて侍りし返事に
遣はし

思ひきやの歌國
のりの心の中を
思ひやりてよめ
る也

草深き谷々將本
年深き谷の朝霧
かつみても覺東
なくそ忘られぬ
かしさあり

行隠れに雪をそ
へ経るに降るを
そへたり三四句
將本さかしらに
ふるハ思のさあ
り
こむらさき將本
紫のさあり

思ひきや秋の夜風の寒けきに妹あきとこにひとりねんどの
左大將の比叡にのぼりて歸るむかへにまかりて後ひさ
えうまからざりしかばおぼつかあきよしの歌の侍りし
返事に
草深き谷の秋ざりうづみてんればつかあきぞ忘れぬべし
左中將さねすけが許にまかりて昔物語あどせしに
かいて後昔をこふる涙こそこゝらひとめもつゝまざりけれ
加階し侍るべき年もれてえし侍らで雪いたくふる日人
のもどに
憂世にのゆき隠れあでかきくもりふるハ心の外にもある哉
人のかうぶりし侍りしに
こむらさきたあびく雲をえるべにて位のやまの峯ハ尋ねん
ぶくある人の許にさぬの袖のかざりをつかひすとて

うらさひてなう
らさひてやさし
きを悲しきと普
本にあり

うらさえて常にもあらぬ衣手の袖の限りを見るぞやさしき
おほいまうちぎみの家にて藤の花を見侍りしついでに
藤の花こきむらさきの色よりをしむ心をたれかそめけん
ともどきが四月一日有馬よりまうできて時鳥の鳴つる
といひ侍れば

時鳥云々の四五
句いかなる人か
きてかたりなん
と普本にあり
御服一本御はて
さあり

時鳥まつ初こゑをいつしかといかなる人に来てかたりけん
堀河の中宮うせ給ひて御服過して内侍のまかり出しに
雨のふり侍りしかばつかひし、
故郷のありとも君を忘れけん今日ふりいづる雨のやまじを
ぬす人の入りて侍りしに又の日人のかいねりのきぬを
おこせて侍りしに

衣かな云々普本
衣河かあるせに
こそさある方ま
さりぬべし

淺からずおもひそめてし衣かかゝる時こそ袖もひぢけれ
すけゆきが家に冬の月のおもしろきにまかりて侍りし

をり明しハ居に
花の縁の折をそ
へたるなるへし

いざかくてをり明してん冬の月春の花にもおとらざりけり
男なく成て侍る女の程もあくこと人にあひぬと聞て遣
ひしける

たのめ普本たの
みさあり
なくなりたる秋
の下かりけれの
さいふ五字普本
にあり

年へにし人のかたみの藤衣すてやまにけんまたやかけたる
大貳くにのりがすのうおこせて侍りしに
くらぬきぬたのめそめてし色あればいと深くも成ぬべき哉
まためのあく成たる秋さむき風をとぬこといひて
侍りし返事に
こしかたもみえであがむる雁がねの羽風にはらふ床よ悲しな
年頃つかさも給のらぬに子日しに人のゐていでまかり
たりしに

谷深く沈むたとひにひかされて老ぬるまつの人も手ふれず

ちりを出ぬの此
世を出たりの意
なり

漁火の云々普本
いさり火のつゆ
にもみちてみけ
めれば浪の中に
や秋を過さんこ
あり

山里の普本山里
にさあり事そ
もなくは是さ
ふ事なけれさ
の意なり
あきほてかた
秋果方に飽をそ
へたり
もてたかへて
取遣へて使の持
来りしなり

衛門督入道し侍りしにつかひし、

ます鏡ふた、びよにやくもるとて塵を出ぬと聞ひまことか

津の國にまかりていさりをするをみて

いさり火の底のみくづとみえぬるの浪の中にや秋を惜まん

前の大貳くにのりの朝臣の四十九日玄侍りし誦經の鐘

にそへて侍りし

鐘のおどに涙の玉をそへてだに玉のかざりを増んとぞ思ふ

山里ある所に秋の頃をひ住て人につかはし、

紅葉ちる頃ありけりな山里のことぞともあく袖のぬる、

すけなりが入道して侍りしに遣ひし、

風早みあきはでがたの葛の葉のうらみつゝのみ世をばふる哉

とてつかひしたる返事なかくて外へ遣ひしたる返事を

もてたがへてまうできたれば又遣ひす

櫻も普本櫻のこ
ある方まさりぬ
へし

つかさの云々よ
き官になりたし
さ思ふも功徳を
なさんと思ふ故
也衣食住をたご
り名利を願ふに
いひてなり
成せハ普本成な
ハさあり
こぬ人を普本こ
ぬ人にさあり

秋深き云々普本
秋深きまきたきに
おゆるさあり

とびかよふ蝶のたよりにちりにきと聞し櫻も花をみるかあ

えいしちがもどにまかりてつかさのはしく侍ること

功徳の爲ありといひてよみて侍りし

世を渡すひざりをさへやあやまさん深き願のあらず成せば

九月廿日のやせ右大将嵯峨野にまかりて侍りし供にて

こぬ人を何にたとへて語らましくる、秋惜む野への心地を

歸りまうできて又の日大将の家にてまぐれのし侍りし

に

冬をあさみまだき時雨と思ひしをたへざりけりあ老の涙も

同じ大将の家に九月ばかりに庚申し侍りしに菊の花を

題にて

秋深きまがさにおふる菊みれば花のうへともおもはえぬ哉

十月ついたち頭に殿上のをのことも嵯峨野にまかりし

おふる普本おの
るさあり一本に
此歌及さたいに
よみて侍りしに
二行なき方よる
しからんか

申文の官位を望
み申す所状なり
秋ふさも一本年
ふさもさあり

ほか見れぬ云々
こも物思のある
時人の家の花を
みてよめるなる
へし

家てしを一本家
出しをつてまし
なつてけんさあ
り
同じこの元輔
さ同じやうに春
の司召にもれて
なり

驚も普本驚はさ
あり

心あてに云々普
本心みに折し
あらはさあり下
句の此度の春の
司召にもれて思
ひ歎く人もあり
さの意なり櫻は
我身にたさへし
なり
まかり通ふ所
常に行通ふ家な
るへし
くるしなけれ
一本くる日なけ
れはさあり普本
にのさありなく
さふ人しあら
しに思ひし山
里に花のたよ
りに人めみる
か
さいふ歌あり
惜からぬ以下八
首普本によりて
補ふこむる宿に
く拾遺集にほま
むる野へにてさ
あり

によみて侍りし

秋深みまださにかふる菊の花立かへれともつけにやらばや
とだいによみて侍りし

秋のまだ遠くならぬにかで猶立かへりねと人につけばや
正月申文につけて侍しさよちひ藏人に

露のいのちもしとまりて秋ふとも今年ばかりぞ春の望の
文月ばかりに萩の咲みだれたる家にまかりて

外みれば秋はぎの花さきにけりさせわが宿の下葉のみこき
山寺にまかり侍りしにある人の法師になりたるさめり

といひ侍ればつかのし、
愛世もし外にさしやといへでしを道に入ぬと誰かつてまし

くにもちがおさじごとのぞみからで歎くと聞侍りし頃
遣のし、

つれづれとちがむる春の驚も慰さめてだにかかばさかさん

つかさめしの後うちさふらひし内侍の許に遣のし、
心あてにたよりもあらば傳へさんさかで露けき櫻ありさど

山里にまかりかよふ所ありしを花見にと人々のまうで
きたりしに

櫻こそ嬉しかりけれ花見にといひで人のくるしきければ
同じ山里に侍りし頃人々とふらはんとてまうできて物

さどいひ侍りしに
をしからぬ命やさらにのびぬらんをはりの煙こむる宿にて

七月七日庚申にあたりて侍りしに
いとしいもねざるらんと思ふ哉今日の今夜こよにあへる棚機

又人のもとに遣はし、
いふかひも今日のあらじか棚機の後の秋まつやどの遠さに

清慎公ハ實頼公
なり

賀 清慎公五十賀し侍りける時の屏風に
君が世を何にたとへんさくれ石の巖とあらん程もあかねバ
賀の屏風に

をさめの袖ハ天
女の羽衣ないへ
る也

音なし川紀國平
妻郡にあり

動さき岩はのはても君ぞ見んをとめの袖のちでつくすまで
戀二忍びてけさうし侍りける女のもどにつかひしける
音さしの川とぞつひにあがれ出るいはで物おもふ人の涙ハ
戀三廉義公家の障子の繪にちでしこひたる家のこゝろば
そげなるを

起に置をかれた
り

かくはかり云々
さほに我侍つ
かまりたらハ時
鳥の近くもなく
へきかきても楢
高く遠にも鳴わ
たる事かなさな
り
井の云々走井
走逢坂の邊なり

思ひえる人に見せばやよもすがら我床ちつにおきぬたる露
雜春 廉義公の障子に
かくばかりまつとえらばやるとゝぎす梢高くもあき渡る哉
雜秋 清慎公五十賀屏風に
はしり井の程をえらばや逢坂の關ひさこゆるゆふかけの駒

夕景に鹿毛を
へて也
此駒の走井の程
にのかけをし
らばやさなり
九條石大臣ハ師
輔公なり

内裏御屏風に

月かげの田上川に清ければあじろのひをのよるもみえけり
雜賀 九條右大臣五十賀屏風に竹ある所に花の木ちかくあり
花の色も常磐あらかんちよ竹の長きよにおく露しかゝらバ
天徳四年右大臣五十賀屏風に

竈門山ハ筑前御
笠郡にあり

春ハもぬ云々
歌の上句の木に
けしなり

千年へん君しいまさバすべらぎの天の下こそうしろやすけれ
つくしへまかりける時にかまど山のもとに宿りて侍り
けるに道づらに侍りける木に古くかきつけて侍りける
春ハもえ秋ハこがるゝかまど山
かすみもきりもけふりとぞ見る

後拾遺集

春下 天曆御時の屏風に桃の花ありける所をよめる
飽ざらバ千代までかさせ桃の花はあもかいらと春も絶ねバ

いろくのの云々
草花咲乱れたる
夕へに松虫の聞
のたる面白き折
節によまれし歌
なるべし

秋の野に云々伊
勢物語に狩終し
柳機つめに宿し
らんさあるに同
し心なり

薄くく云々露
の心を分る所有
ておく故菊の色
も薄きさ濃きこ
のあるにやこ也

糸よわみまてハ
存なから服衣の
さまなよめり

秋上題迄ら老

いろくのの花のひもとく夕暮に千世まつ虫の聲予きこゆる
天曆御時の御屏風に小鷹狩する野に旅人のやどれる所
をよめる

秋の野にかりぞ暮ぬる女郎花こよひばかりの宿もかさきん
天曆御時御屏風に八月十五夜前裁うゑたる所をよめる
今年よりうゑはじめたる我宿の花のいつれの秋か見ざらん
秋下天曆御時御屏風に菊をもてわそふ家ある所をよめる
うすくこく色ぞみえけるさくの花露や心をわきてれくらん

冬天曆御時御屏風の繪に十二月雪ふれる所をよめる
我やどにふりまぐ雪を春にまだ年こえぬまの花とこそみれ
戀三ぶくに侍りける頃忍びたる人に遣はしける
藤衣はつる、袖のいとよわみたえてあひみぬ程予わりきさ

契りきなハ契り
しよなの意也

さいかにのい
いひかけて細き
も其縁なり

うきなから云々
頼もしからぬ人
の心の憂きな
らさハいへこ悲
しかりて我中ハ
かばりて我思ふ
限ならんと思ふ
にであるさなり
神無月云々屏風
の繪に常磐木生
たる峰に雲のた
なひけるさまな
し書たるなるへ

戀四心かはり侍りける女に人にかはりて

ちぎりさあかたみに袖をまぼりつゝ末の松山浪こさじとの

あり所迄らぬ女に

さゝがにのいづくに人のありとだに心細くも迄らでふる哉

詞花集

賀 ある人の子三人にかうぶりせさせたりけるに又の日遣
はしける

松嶋の磯にむれるる芦たづのおのがさまとみえし千代哉
戀下通ひける女のこと人に物いふと聞いていひ遣はしける
うさあがらさすがに物の悲しきハ今の限どかもふありけり

新古今集

賀 貞信公家屏風に
神無月紅葉も迄らぬとさハ木に万世かゝれみねの迄らくも

新勅撰集

賀 天徳二年右大臣五十賀屏風

我宿の千代のかいたけふしとはみさも行末のはるかなる哉

菊をよみ侍りける

どかやどの菊のまら露万世の秋のためしにおきてこそみめ

雜四 天祿元年大嘗會悠記御屏風に

唐崎の濱のまさどのつくるまで春のさどりの久しからなん

續後撰集

賀 月次の屏風の繪を歌によみ侍りける

千歳ふる松といふとも植て見る人ぞ數へてまるべかりける

續千載集

秋下題まらず

もみぢ葉のちりくる秋の大井川渡る淵瀬もみえず予有ける

久しからなん
久しくあらなん
をつくめしにて
久しくあるやう
に願ふ意也

花薄の歌秋の暮
にあまた生茂れ
る源の風に打露
めるなるへし

新千載集

春上題まらず

雪とのみあやまたれしをうめの花紅にさへにふひぬるかち

秋下題まらず

花薄まねく袂のあまたわれと秋のどまらぬ物もぞありける

新續古今集

賀 大宰大貳國章が子うませ侍りけるいかに遣しける破子

の繪にかゝせ侍りける

住の江に濱のまさどの苔ふりて巖とならん程をこそおもへ

新拾遺集

秋上題まらず

あべてさく花のちかにも女郎花多かる野べの過うかりけり

なへてさく云々
一統に八千種
くの咲たる花
更の花の多
女に女野へ
女さいたる名
つかしに過
くしに

元補集補遺 終

能宣集

佐々木弘綱

同 信綱

標註

小野宮太政大臣の七十の賀左大臣し給ひてよませ給ひける御屏風の歌

春

たづのすむ澤べの芦の下根とけ汀もえいつる春のきにけり
花さかぬ常磐の山のうぐひすの霞を見てやはるをまらん

夏

夏山の木高き陰に立よりて見れば千年のかげにぞありける
龜山の岩はのうへのもみぢ葉のちらで秋をぞ數ふべらある

冬

たつのすむ云々
詩に鶴鳴于九皋
さいへる心より
よめり下根とけ
さひ冬のほさけ
の根にむすほれ
たるか春陽のほ
るなけてしぬ氣

霜のふる年毎に
猶昔本霜雪のふ
る年ごとにさあ
り
つぎしつぎの杖
なつかぬに
なつかぬに
なつかぬに
なつかぬに
なつかぬに

平代水さるを引
さいふ故に苗代
水の引さめよこ
なり鶴の名残
なまふ心なり
二句昔本今跡
なるさあり

さくうの花を普
本櫻の花をさあ
るはわろし

ねなくらへにや
のれは葛蒲の根
に郭公の音を
けたり

かせるの手向る
をいふ
だなはたにの歌
棚機によせて我
戀をよめるなり

春日野のときの松の霜のふる年ごとにさあは色まさりつゝ
おあじるいの竹の杖にそへ侍る

君が爲今日さる竹の杖おれはまだつぎもせず千代ぞこもれる

屏風の歌よめと侍るに正月子日松ひき若菜つむところ

ひく松の千年の春の春日野の若菜もつまん物にやのあらぬ

二月田つくり侍る所

雁がねぞ今日かへるある小山田の苗代水のひきもどめおん

三月つごもりばかりに花の下にてをしみ侍るとて

ちり果る花を惜めバ大かたの春さへくるゝことをしぞ思ふ

四月山里にうの花咲たる所を旅人とまる

山ちかみさく卯花を時あらでふる雪とのみあやまたれつゝ

五月五日人の家に葛蒲ふきて侍り女どもやどゝぎす聞

侍るに

あやめ草引かけたれば子規ねをくらべにやわがやどにあく
六月はらへし侍るところ

みそぎする川のふちせに引あみを大幣なりと人やみるらん

七月七日たあばたに物かせる所侍るに

棚機にかせる衣のうちかへし別れてこひんほどのほるけさ

八月駒迎し侍る所

むかへぐる人もあるかき關山の駒引かへすかげのまるしも

九月田舎の家の稻をとるにかりする人のまうできたる

女ども侍り

かりにとて我宿のべにくる人の稻おほせ鳥にあはんとや思ふ

十月網代に紅葉流れよりたるといまりて見侍る

もみぢ葉のよれる網代のわかきして過にし秋のせに社有けれ

十一月神祭る家

ふりのみ降に
舊をそへたり

新らしき古里
を對にしてあ
やにせるなり

猶やまた其上
に意なり

柳葉の霜うち拂ひかれずのみすめとすいのるかみの御前に
十二月雪ふる所

新らしき春さへ近くありゆけバふりのみまさる年の雪かき
又屏風の歌よめと侍るに春稻荷詣してかへるもの侍り
花の陰にてやすむもの有る所

さしてくる稻荷の山の道とはみ花のあたりに宿やからまし
春日野に若菜つみ侍るところ

新らしき春くるごとくにふる里の春日の野邊に若菜をぞつむ
同じ所に祭の使の歸り侍るに

やをとめも霞もどもに今日しこそ春日の野邊に立渡るらし
須磨の浦まはやく侍るところ

すまの浦のもしやのけふり春あればそらに霞の猶や立らん
くれの春富士の山近き所に人の家侍り

天の橋立ハ丹後
與謝郡にあり
世を經る蟹に天
の橋立をかけた
り

末の松山陸奥宮
城郡にあり

わたりして曾木
わたりしてさあり

小倉山山城葛野
郡にあり
名にこそ有らし
一本名にこそ有
けれさあり

草深みまだきつけたる蚊遣火とみゆるいふヒの煙かりけり

住吉のかたかきて侍るところ

すみの江の年ふるまつの齡をバかへるくも浪やかぞふる

天の橋立わたりにあまの侍る

たが爲にわたし初けんよさの海の浦に世をふるあまの橋立

海のをとりある人の家見いだして侍り

漁火のくるればうかぶ影をこそ天つ星といふべかりけれ

末の松山に馬のりどもありてやすみ侍る

音にさくすゑの松山今日こそ打くる浪のこえくすみめ

うき嶋のはしわたりして侍る所に

浮嶋と名にさくれど浪の上に所もさらすよをぞ經にける

夏季小倉の山

紅葉せばあかく成あをぐら山秋まつ程の名にこそ有らし

くれば材木を云
明暮にくれをか
ねたり

さかの事ハ毎年
のならばしの事
に嵯峨野をそへ
たり

前栽のつらハ庭
の植込のほり
を云

あやなくハわけ
もなき事になり

狩に假をかれ取
に鳥をうねたり
栗駒山ハ山城久
世郡と陸奥磐井
郡とにわれこ
ハ山城のなる
へし

ひなへてハ目を
經てに氷魚をそ
へたり

まっすかの渡三
河にあり
のりて侍る普本
のりてまかるこ
あり

まぢや渡らん普
本こひや渡らん
さあり

大井川くれくだす人の家侍り男女見侍り
従ふるしあけくれ下す大井川見されぞ玄つる四方の人さへ
嵯峨野に藏人所の人々まかりて御前のせんざいなり
いで、

秋ぞとに大宮人のくる野べのさかのこととや花も見るらん
人の家に前栽のつらに侍りて

女郎花にやふあたりにはむつるればあやかく露や心かくらん
小野にし侍る山里に人の家の紅葉面白さに女どもの出

ゐて侍るにかりする人の鷹すゑてまかりたる
山城の小野の山邊の里遠みかりのやどりをとりぞあくる

栗駒山なる人の家に女ども紅葉見侍り
紅葉するくり駒山の夕かけをいざわが宿にうつしもたらん
宇治のあじろに紅葉ちりあがれて侍る

もみぢ葉のひを經てよれる網代木の錦を橋に渡すとぞみる
神樂玄侍る

みや人のたける庭火のおきあかし聲々あそぶ神のさねかも
まかすがのわたり雪ふり侍りける船にのりて侍る

雪によりかへりやせましまかすがに故郷戀しいざ渡りあん
女のもとに春の頃をひいかで物いひ侍らんどいひ遣り

じて侍るに秋にありてつゆばかりいはんどいひ侍れば
天の川へだつる中のこひよりもひさしき秋をまぢや渡らん

やよひのつごもりがたに雨のふる夜春のくるを惜み
侍るこゝろをよむに

くれぬべき春のかたみと思ひつゝ花の雫にぬれんこよひの
人の歌合し侍るによみてと侍れば

霞

霞だに立おくれせば新しき春のくるとも去らずぞあらまし
梅

梅の花匂ふあたりの夕ぐれにわやかく人にわやまたれつゝ
春風

はるかぜの吹どきがたのうす氷底の玉藻もいまやみだるゝ
岩躑躅

咲ぬればちる事かたき岩躑躅名にいたがぬ色にぞ有ける
卯花

卯花のさけるあたりは時あらぬ雪ふるさとの垣ねとぞみる
子規

時鳥ねざめに聲をきしよりわやめも去らぬ物をこそ思へ
夏虫

もゆる火の中の契を夏虫のいかにせしかば身にもかふらん

うす氷普本水うすみさあり

名に違はぬ岩さいふ名に違はぬなり色にそ一本花にそあり

あつまらに普本東路をさあり

立田山拾遺集にたつ山は結句たまらさけりさありたつさいふより錦のたまらぬさよめる也

蚊遣火

終夜^{よすがら}去たもえわたる蚊遣火にこひする人をよそへてぞみる

蒨葢

東路に別るゝかやのみだれつゝたが爲どかひふきて靡かん

秋霧

秋ぎりの峯にも尾にもたつた山もみぢの錦たまらざるらし

女郎花

女郎花わだにや身をば思ふらんつゆの心にわやまたれつゝ

薄

我だにも結びおきていはさ薄あべて人をばまねきしもせじ

時雨

そま山に立けふりこそ神無月去ぐれをくだす雲とちりけれ

初霜

夜をさむみ籬のくさを見渡せば今朝ぞ初霜かきにけらしか

氷

山川をおちくる瀧のおともせずいま氷にとちぞまぬらし

同じやうなる事人のま侍るに初春

かくれぬの氷のまより下根さし芦のわか葉も今やどくらん

霞

霞だにたいすありせば春きぬど何をまるしに人のとひまし

鶯

やまたかみ雪ふるすより鶯のいづる初音のけふぞなくかる

梅

句をば風にそふとも梅のは赤色さへわやかあだにちらすか

若菜

白雪のまだふるさとの春日野にいざうち拂ひ若菜つみてん

山高み後拾遺集
に山深みさあり
雪降るに古集を
いひかけたり

かくれぬの瀧沼
なり

松花云々春を借
むも花故なるに
早くはなちりそ
さなり

櫻

櫻ばあまださかちりそ何により春をば人のをしむどかま

柳

ともすれば風のよるにぞ青柳の糸のなかく乱れそめける

子日松

いつしかもひく人どもや春の野に生る子日の松のまつらん

蛙

今朝きけバ澤の蛙も鳴にけり春のくれにもなりぬべらあり

山吹

こくれつゝ春のあかばにかりにけり今や咲らん山ぶきの花

歸雁

天の原わきて鳴ある雁がねのふるさと尋ねかへるあるべし

春夜月

ふる春雨に普本
ふる春雨そこあ
るよろし

はかられぬ秋か
れ又すかされな
さいふ意なり

花ちらべ起つゝも見ん常よりもさやけくてらせ春の夜の月

春雨

戀

わがやどの垣根の草の浅みどりふる春雨にいろめける
うもれ木のうへにつれなく有ながら下に深き戀もする哉
こひくゝて逢とも夢にみつる夜のいとゞ寐覺の恨めしき哉
さりともと頼む心にはかられて去かれぬもの命ありけり
人玄れぬこひの道ある關守の忍びにとひしこどにぞ有ける
旅ゆく人に雁の聲をきゝて

草枕われのみからず雁がねもたびのそらにぞさき渡るある
おやいまうちぎみの桂にて水のやどりの秋の花といふ
題よめと侍るに

水のいろも花の匂を今日そへて千年の秋のためしとぞみる

水なき一本波な
きさあり

さくらば鳥の寐
所を云

色をそへけん一
本色をそへん
さあり

はるくは春々
に透々なかねた
り

越ける普本越く
るさあり

藤花

こむらさき匂へる藤の花すりのみづさき空に浪ぞたちける
人の屏風に小鳥をすゑこにかひて侍るかたをかきては
べる

様々に山のふるすのこふらめどこのとくらに鳴聲もせず
人の産して侍る所にて

時しもあれ春の始に生出たる松の八千世のいろをそへけん
小野宮おほいまうちぎみ月輪寺の櫻の花見侍りしに

山櫻千代のはるくゝこどしより色ささまされ君が見にこべ
まのすのつこもりの夜山寺にまかりこもりて侍るつど
めて僧のもどより今日の何事か侍るといひて侍りしに
人玄れすいりさと思ひしかひもなく年も越ける山路也けり
同じ山寺にて法師の松ひきにさそひ侍るにまうでたり

あせすは色のか
はらす浅くさら
ぬな云

侍るかもさは侍
る人のもさにな
り

し室の前に大いある松の木の下にて昔住ける人のひき
ける松ありこゝにゐて侍らんと申し侍りしに
引そめて世々をへにける松あれと緑の色のあせすもある哉
藏人所のをのこども花見にまかり出て侍るに藏人にあ
りて侍るがもどにつかひしける
花のいろをよそに見つゝも諸共にをりし昔の人ぞこひしき

能宣集終

見もはてて云々
花のちり過るま
て見果すしての
く事思へば空
に飛ちる花さ共
に心も空にな
るなり
朝ごにの歌毎
朝掃除を忘らぬ
宿なれさ花ちり
まく程は其ま
てみんとなり
平野祭ハ四月上
申日なり

能宣集補遺

拾遺集

春題まらず

見もはていゆくと思へばちる花につけて心の空にさるかな
延喜御時藤壺女御の歌合に
朝ごととにわがはく宿の庭櫻はさちるやどの手もふれで見ん
冬・恒徳公家の屏風に
冬されば嵐の聲もたかさこの松につけてぞきくべかりける
我はじめて平野祭に男使たてし時謠ふべき歌よませしに
千早ふる平野の松の枝えげみ千世も八千世も色のかはらじ
うぶやの七夜にまかりて
君が經ん八百万代を數ふればかつく今日ぞ七日かりける
清慎公七十賀え侍りけるに竹の杖を作りて

位山云々濤慎公
一太政大臣關白從
位命不足なし此
後御命の久し
れさの心なり
山の飛彈也万代
の坂の只万代を
こゆる事なり

いかで俗にさ
うかして云に
同し君を思ふ
後世まで物思
なるべき何と
ぞ慰さめたすけ
てよの意也

ありけり一本あ
りさつとあり
長等山近江志賀
郡にあり

位山みねまでつける杖あれどいまよろづ代の坂のためあり
戀二はじめて女の許にまかりてあしたに遣はしける
あふ事を待し月日の程よりもけふのくれこそ久しかりけれ
女に遣はしける
あさ氷どくるまもなき君によりあどてそぼつる袂あるらん
戀五女に遣はしける
いかでくこふる心をあぐさめて後の世までの物を思はじ
雜眷小一條のおやいまうち君の家の障子に
田子の浦に霞のふかくみゆるかき藻まの煙たちや添らん
哀傷服に侍りける頃あひまりて侍りける女の尻にありぬと
聞て遣はしける
墨染の色に我のみと思ひしをうき世をそむく人もありけり
雜下 安和元年大嘗會風俗あがらの山

櫻花云々うつろ
ひねへき色に句
ふ名残に春まで
惜く思はるゝと
なり
月の輪ハ西京愛
宕の籠なり
惠慶は播磨の講
師なり

さいかみの長らの山のあがららて樂しかるべき君が御代哉

後拾遺集

春上花を惜むこゝろをよめる

櫻花にはふかざりにおほかたの春さへ惜くおもやゆるかき

春下月の輪といふ所にまかりて元輔惠慶あどゝどもに庭の

藤の花をもてあそびてよみ侍りける

ふぢの花さかりとあれば庭の面に思ひもあけぬ波ぞ立ける

詞花集

春 題えらす

ちる花にせきどめらるゝ山川のふかくも春の成にけるかな

秋 初霜をよめる

初霜もおきにけらしあけさみれば野への淺茅も色附にけり

題えらす

龍宣集補遺

佐々木弘綱
佐々木信綱
標註

順家集

東京 博文館藏版

順集

佐々木弘綱
同 信綱 校

さくりにて云々ハ
順がさくりにて得
しはう文字なり
し由をいへる也
あはれ以下歌の
序なり
初花の初字類
本になしされと
ある方まさりぬ
へし
あそひあかき
ハ管絃のあそび
をしてあかさせ
給ふなり
こきハ小木にヤ

西の四條の宮の源中納言の御前にちひさき紅梅を植さ
せ給ひたりけるをはじめて花咲たる年よろこびて人々
文字一つをさぐりてよむ歌の序 さぐりてう文字を
給はれり
あはれ春の始の東よりといふ事を西の宮よりありけり
との此梅の初花を見てあんな驚ろかれけるこれにより我
おとこの君やまどことのをのことも引つらねてさぶら
ひせ給ひから竹の笛の一よあそびあかさせ給ひかゝる
ふしをたゞにやのすぐすべきとて此こきの生出て万代

梅津川の歌う文
字を頭にかきて
よめるなり三句
類本流れること
あり
あめつちの歌字
津保物語國邊に
みわて此頃事文
字を習ふ者の始
とせし也其次序
天地星空山川峰
谷雲霧室菩人犬
上末まては其意
知らるれことわ
さる以下ハ解す
へからす

にほひかな類本
錦かなある方
まされり
春の涙さも類本
春の涙わけさあ

の老木にきらんまでの心ばへをよませ給ふに
白浪のまらぬ身かれど大よどの仰ごとをばいかいそむかん
うめづ川此くれよりぞ流れての嬉させゝみえんみあそこ
あめつちの歌 四十八首
もと藤原の有忠の朝臣藤六が加へしかり彼のかみのか
ざりにその文字をすゑたりこれのまもにもすゑ時をも
わかちつゝよめる
春
あらさじと打かへすらん小山田の苗代水にぬれてつくるあ
めもはるに雪まも青く成にけり今日こそ野べに若菜摘てめ
つくは山さける櫻の匂をばいりてをらねとよそあがら見つ
ちくさにもやころふ花のにはひ哉いづら青柳ぬひし糸すぢ
はのゝと明石の濱をみわたせば春の波ともいづる船のや

君やかしくし類
本きてや隠れさし
又一本君や隠れさし
しゝさあり

らにハ蘭をいふ
秋の野類本冬
野さあり又結句
小山田の原さあ

見れば類本見
ぬぬさあり
かた戀に云々夏
出によせてみつ
からの戀をいへ
るなり夏出のハ
夏虫の如くなり

こひちハ戀路に
泥をかれたり
いひなす類本
ひなせさあり

まづくさへ梅の花がさえるき哉雨にぬれじと君やかくしゝ
そら寒みむすびし氷うちとけていまや行らん春の田のみぞ
らにもかれ菊も枯よし秋の野のもえにける哉さやの山づら
夏
やまも野も夏草繁く成にけりさどかまだしき宿のかるかや
まつ人も見えぬバ夏もまら雪や猶ふりまけるこしのまら山
かた戀に身をやきつゝも夏虫のあわれぬびしき物を思ふか
はつかにも思ひ掛ていゆふだすき賀茂の河波立よらじやハ
みをつめバもの思ふらし郭公さきのみまどふ五月雨のやみ
ねを深みまだあらハれぬ菖蒲草人をこひぢにえこそ離れね
たれにより祈るせゝにもあらくに淺く云あす大幣にはた
には見ればやを夢生て荒にけりからくしてだに君が訪ぬに
秋

西宮源大納言の大纏のところに立べき四尺屏風あたらしく調せらるゝ料の歌

元日

立てそむらん
本たらしそむらん
類本立もそむらん
んさあり

昨日まで雪にこもりしみよし野の霞のけふや立てそむらん
子日する所を

岩におふる子日の松も種しあれば千年の春の我におやせよ
二月初午稻荷の社にまうづる人に

すきくは松々
に過々をそへた
るなるべし

いかり山尾上にたてるすぎくに行かふ人のたねぬけふ哉
あら田うの所を

おりたてばうらまでひづる袂ゆる何打かへす荒田あるらん
三月花つみの所

花をみつまし類
本花なつまし類
さある方よろし
袖につみつる類
本袖にみつくる類
さあり

いかにして花をばつまじ花の香を袖に摘つる罪もこそうれ
小弓射るところ

春ふかき宿にいればやあづさ弓ふく風にさへ花のちるらん

四月神祭るところ

神のます杜のまた草風ふけばあびきても皆まつるころかあ

五月ともしする所

郭公まつにつけてやともしする人も山べに夜をあかすらん

六月はらへする所

願事をきかずあらぶる神だにも今日いなどしと人のまらあん

七月七日棚機祭する所

棚機に空にまゐるらんさゝがにのいとかくばかりまつる心を

十五日ばんもたせて山寺に詣づるところ

今日のためをれる蓮の葉をひろみ露おく山に我のきにけり

八月逢坂の關に駒むかへの人々こゆる所

かに、我夜半にきつらん相坂のせきあけてこそ駒も引けれ

風ふけのまては
靡きての序な
てから社の事し
ていへるなり

ほんは盆なり
盆に以て盆
飲安盃に盃
施方自恣僧
へに佛にそな
奉るも盆を盆
さもいへり盆
も記にへり盆
み記にへり盆

釣殿に人々あつまりて月見る所
水の面に宿れる月ののどけきのみみりて人も寐ぬ夜あればか
九月に鷹がりのどころ
里遠み暮るや野べにとまるべし縹かやせ鳥に宿やからまし
月夜にきぬうつどころ
風さむみ鳴かりがねにあのすればよるの衣の打まさりけり
十月志賀の山越の人々
名をさけバ昔あがらの山おれを去ぐるゝ頃の色まさりけり
十一月賀茂の臨時祭に
千早ふるかもの河霧さるあかにまざるさのすれる衣あけり
十二月佛名おこあふ家
冬山の雪まにとれるあはれ木のうへにぞくゆる隠す罪あく
天徳四年三月卅日内裏の歌合のくだりかた仰によりて

色まさりけり類
本也かほりけり
さある方よるし
臨時祭に類本臨
時祭見る車さあ
る

かくす類本殘す
さあり

歌合のくだり方
天徳歌合により
考るにくだり方
左の誤なり類本

にふれ云々事
物にふれ云々事
に一本にあり
古万葉集のあり
集の事延喜の業
頃新撰万葉集の
へるなるべし
沙彌滿誓の歌ハ
て万葉集三の歌ハ
とへん朝ひらきた
なきし船の跡

奉る三首鶯

山吹

戀

氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬうぐひすのこゑ
はるふかみ井手の河波立かへり見てこそゆかめ山吹のはさ
たが爲に君をこふらん戀わびて我のわれにもあらず成ゆく
應和元年七月十一日四歳なる女子をうしあひ同年八月
六日又いつゝあるをのこ子をうしあひて無常のおもひ
物にふれておこるかあしひの涙かわかず古万葉集中に
沙彌滿誓がよめる歌の中に世中を何にたとへんといへ
ることをかりてかしらにおきてよめる
世の中を何にたとへんわかねさす朝日まつまの萩の上の露
世の中を何にたとへん夕露もまたできえぬるあさがねの花

定めなき一本
さためなきせ
あり

ふく風一本吹
風にさあり

ふし松類本姫松
とあり

秋の野類本秋の
田さあり

冬の夜を類本冬
浅み給句けぬる
白雪さあり

成にけり類本成
にきさあり
判官の勞六年ハ
判官をつとむる
六年にして更
に昇進せぬを云
馬の詩類本馬の
つたさあり

世の中を何にたどへん飛鳥川定めあき世にたきつ水のあわ
世の中を何にたどへんうたゝ寐の夢路ばかりに通ふ玉をこ
世の中を何にたどへんふく風のゆくへもまらぬ峯のまら雲
世の中を何にたどへん水はやみかつくづれゆく岸のふし松
世の中を何にたどへん秋の野をのかにてらすよひの稻妻
世の中を何にたどへんにをり江のそこにあらでも宿る月影
世の中を何にたどへん草も木も枯ゆくころの野べの虫のね
世の中を何にたどへん冬の夜をふると見るまにけぬる泡雪
民部卿清原元輔が弟學生元眞あきま字清用身まがりて後はふ
りするまでまらずして遅く聞にたる由元輔にいひやる
雪のまの空の烟と成にけりあまのはらからあまかつげぬ
應和元年勘解由判官の勞六年いにしへにあらずふるに
かくまづめる人あしつかれたる馬の詩をつくりてつか

さきはの山ハ廿
歳にたらざりし
時ハさいはん爲
なり

秋霧一本朝霧さ
あり

みなしら雲さ一
木みなし草さ
さあり

はにまきて類本
夜半にまきてさ
あり

雪をわつめて昔
見るは孫康か故
事晋書にみえた
り

いひ流しけんハ
澤水の縁語なり
活に無きをかけ
たり

世にハくらへて
類本世にハから
きてさある方ま
さりぬへし

さの長官朝成朝臣にたまふにくいへたる長歌

あらたまのどしのはたちにとらざりしときハ山の
やまさむみかせもさはらぬふぢごるも二たびたちし
あきざりにこゝろもそらにまどひそめみあまら雲と
ありしかり物おもふことの葉をまげみけぬべき露の
はにおきてあついなぎさにもえわたるやたるを袖に
ひろひつゝふゆのはあかどみえまがふ木のまくに
ふりつもるゆきをたもとにわつめつゝふみ見て出し
みちのきは身のうきにのみありければこゝも彼處も
あし根はふまたにのみこそまづみけれ誰このへの
さはみづにあくたづのねひさかたの雲のうへまで
かくれあくたかくきこえてかひありといひ流しけん
われのあやかひもあきさにみつまはの世にハ並べて

まつい一本松の
又一本まつにさ
あり

ゆもさりあへず
類本もこりあ
へずさあり
あはれこいま
類本あはれ今
にさあり

諸矢しつるハ二
つにて藏人民部
二度の任官を准
らへいへり一首
の意ハ誰引あく
る人しなしさ作
思ひしに本望を
達したる事よさ
なり
春柳類本青柳と
あり

すみの江の まついのむさしく かいぬれど みせりの衣
ぬぎかへん はるのいつとも 玄らさみの 波路にいたく
ゆきかよひ ゆもどりあへず ちりにける 船のわれをし
君しあらば あれれといまだ 玄つめじと あまのつり繩
うちはへて ひくとしきかバ ものの思はじ

應和二年五月に東宮藏人に成て月の内に民部丞にうつりて二度よろこびあり思をのべてくらの命婦にやる

引人もあしとわびつる梓弓いまだうれしきもろや玄つれば

同年十一月前朱雀院の姫宮の御装着の日の料に御屏風

つかうまつるに人々におやせて奉らせ給ふ歌

春柳

露をおもみ絶ぬばかりの青柳のいくめかけたるこがねある覽

四月卯花さける所

旅人を度々ゆく
たび人ををゆく
度ごにさ一本
にあり

水清み類本底滑
みさあり
千代になるへき
類本千代にすむ
へきさある方ま
さりさまなり

時雨ふるらしな
風や吹らし瀬に
もを潮々にさ類
本にあり
淀のわたりの類
本淀のわたりの類
思ひこそやれさ
あり

我宿のかきねや春をへだつらん夏きにけりとみゆるうの花

旅人やとゞぎすをさく

おぼつかあゆくたび人をたれとてか山郭公まづさのるらん

池のをどりに鶴たてり

池水にさびく玉藻の水きよみ千代さへえるき鶴のかげかち

芦たづの影のみ浮ぶ池水の千世にさるべきさるしとぞみる

とやき雁を見る人

里遠み雲路かきわけ水くさの跡かどみゆるかりのきにけり

山川に紅葉さがる

水上にまぐれふるらし山川の瀬にも紅葉のいろふかくみゆ

五月あめふる日東宮にさぶらひて雨ふる心の歌を奉る

とて各文字一つをさぐりてあ文字を給りて

雨ふれば草葉の露もまさりけり淀のわたりのおもゆる哉

ある人の料さ
はりによみし也

きかて類不れき
てさあり

柳山川に類本
川風のさあり

おひさらませは
は生す有まし
はの意なり此
の次に類本に
毎毎に春はく
れなほ池に生
る物にさりけ
さいふ歌あり

人もこそあれ類
本人もこそきけ
さあり

内裏女みこたちの御れうに月さみの繪かゝしめ給うて
殿上人に歌をおしつけさせ給ふある人のれうによめる
四月うの花さける家に郭公をまつ

時鳥さかでまつ夜明けにけりやのにうの花白くみえゆく
九月人々大井川に遊ぶに紅葉ちる

もみぢ葉をそま山川に吹つめバ船にまぐれの秋の來にけり
人の家の池に蓮おひぬさの生たり

蓮だにおひさらませバ水の上に露置けりといかであらまし
康保二年女五男八親王御屏風の歌春田舎の家にをんさ

のもどに男きたり
みちどやみ人もかよぬ梅の花君に風やわきてつけつる

雉のさくをきゝて山の櫻を見る
かりにくる人もこそあれ春の野に朝さく雉の近くもある哉

つてよハ傳へよ
にてなだに吹
くるやうに思
ふ意也

折らまくほしき
類本ならまくを
しきさあり

みあれひくハあ
れさいひて佛の
縁の綱さいふ物
の如くなる物を
引こさ也みあれ
の日さいへるも
あれを引日の心
なり

やま櫻木のまた風し心あらバ香をのみつてよ花なちらしそ
卯花さけるに郭公をさく

うのはさのをらまくほしき山里に郭公さへさつゝさくあり
賀茂の祭のさるの日みあれひく

我ひかんみあれにつけて祈る事あるくすもまづ聞ゆ也
人の家に泉のつらにすいむ

山の井をかつむすびつゝ夏衣ひもうちとけて涼むころかき
九月卅日の日男女野へに出て紅葉を見る

いかされバ紅葉にもまだ飽さくにあき果ぬとい今日を云覽
雨のうちこのりの菊を見る

まぐれつゝ移るふ見れば菊の色をまめくど降雨にざりける
人の家に水鳥あり

朝氷どけにけらしかみづの面にやどる鴉鳥ゆきゝさくなり

くるもを類本く
もる白雲を白雲
とあり

おせきの類本の
せきにあり

藤波の歌老てこ
若菜をわやに
したるなり

鶴のれを普本鶴
の跡をあり

露やたくらん類
木露やけねらん
とあり

雪の降日あづまの方におひつらねたり

旅の空くるもくるしあわづま路のゆきゝの方もみえぬ白雲

田のなかに水をひくをどこあり

どは山田種まきかける人よりもぬせぎの水のもり増るらん

人の家の池のやどりの藤の花を

藤波のかゝれるさしの松のわいてわか紫にいかでさくらん

四月神祭る所

夏山にをれる榊の葉を茂みまつりまさるのけふに予有ける

五月五日

澤水にさくつるのねをたづねてやあやめの草を人の引らん

六月はらへの所

夏草にはらへかくれば久かたのあまつ罪との露やおくらん

七月七日たさばた

望月の情渡佐久
那の牧の名なり
そこより出るを
望月の駒さはい
へるなり

てなかけて類本
手にかけてとあ
オ十一の前に類
本十一月とあり
せき類本瀬に
もとあり

たさばたの心をくみて天の川まづくに袖のひぢぬべきかき

八月十五日夜駒引

今日しもわれ逢坂山のやまのはにまづいできぬる望月の駒

九月九日菊を

今日をみて後こそまらめ菊の花さくにたがのぬえるし有とん

十月あじろ

紅葉さへきよるあじろのてをかけてたつ白波もから錦かき

水上にあらし吹らし山川のせきももみぢのはやく見ゆれば

十二月佛名

夜を寒み風さへはらふ宿されば残れる君がつみもあらじあ

四のみこ子日に北野にいで給へる日

古のためしをひけば八千代まで命をのぶる小まつありけり

右兵衛の督あたらしくてうする屏風のれうに正月一日

妹ははし類本人
とはいさわれさ
妹の方まさりて
おほ

きもこそ類本き
てこそあり

さき類本さき
あり

みそき類本ほら
へさあり

人の家にやり水梅の花あり

氷とく風につけつゝうめの花ゆく水にさへにやふかりけり

二月たび人櫻の花を折らす

春日すら長るしつると妹といひ見せんと折れる花を散しそ

三月人の家に女ども柳のもとにあそぶ

枝えげみ手にかけてそめて青柳のいとまあくても暮すけふ哉

四月神まつる

夏衣きもこそまされ同じく神のひもるぎときてかへらん

五月五日庭に馬ひかせて見る

わが駒のときもみるべく萬蒲草ひかぬ先にぞ今日のかけまし

六月はらへするどころ

岩波の立かへるせいのせぎよりあこしのみそきすとや聞らん

七月七日庭に琴ひく人あり

何のけり類本
本なそやひな
きさあり

琴のねもあにわかひきき棚機のおかぬ別をひきしとめねば

八月相坂の關に駒迎ふる人あり

武藏野の駒迎にやせき山のかひうちこえて今日ひきつらん

九月志賀の山越の人々

山おろしの風に紅葉のちり行ばさい波予まづ色づきにける

十月山里に狩する人きたり

山里に心あひする人やあるとわれはし鷹にかかりてぞとふ

十一月あじろ

朝氷とくる網代のひをなればよれどあわにぞ見え渡りける

十二月佛名導師にかづけ物する

わたつ海の底の浪残もけさのあらじかづけべいかに蟹あらずとも

右近少將義孝朝臣と加賀椽正通と慕うつとてやまと歌

十首をつのる正通まけて次の日せめてきたりてこふに

渡津海に綿をそ
へたり
つもの類本つ
るさあり
次の日以下類本
首をあたふ春の
くれさあり

思ふ人類本にた
し人さある方
まされり

たほいすけの大
輔なり

中に爲憲なん云
々の爲憲かみつ
からの上を卑下
してけるなり
さふらふ類本さ
ふらふへきさあ
り

心共につぬに
けるの九字類本
になし

定め申さすべきと仰せ給ふにこれかれ申す前和泉守源
順朝臣ちんおほやけにの梨壺の五人がうちにさだめら
れ宮にの思ふ人八人がうちにさぶらひし人也これをめ
してこそさだめられんによろしからめと申すによりて
かねて其事どのあくて今夜すぐすまじきまめ事ちんあ
るとてめしたり民のつかさたやすつかさのおほいすけ
の君だちこちたかちたにさぶらひ給ひ加賀の椽橋の正
通によみわけさせ順の朝臣にことわらせ學生爲憲に今
日のことをさかおかせ給ふ中に爲憲ちん同じ源といふ
べくもあくちくさに句ふ花のあたりにもぎ木のやう
にてまじりにく侍れどもやんごとあくさぶらふみや
まの麓よりおひいでたる草のゆかりにておやせごどの
いさびがたさに心もともにつるにけるみづぐさして

三五九

たてまつりおくその歌ども順朝臣のさだめまうせる判

かくちん

すゝき

侍従のおもと

花のみさひもどく野べのまの薄いかかる露か結びおきけん

源すけまさの朝臣

秋風にさびくゆふべの花薄やのかにまねくたちどまりちん

このすゝきの歌のすけまさがさびくまねくといへるわ
たりらうぶけたるやうちりいままばしぞ思ひあひせま
し

こちたしも靡きおどれる花薄玉まく葛のまくすちるべし

女郎花

帥のさきみ

玉の緒をみちへし人のたえざらぶぬくべき物を秋のまら露

ありたの朝臣

こなたしし云々
歌を以て勝劣を
さためいへる也
以下是にちなし
まくすなるへし
類本まくるなる
へしとあり

やまごころ類本
やまご名ごあり
そへて類本そへ
てのよめごあり
結ひうつへき類
本結ひこむへき
ごあり

たかみ類本か
みたのさあり

くらぶ山麓の野への女郎花つゆのまたよりうつしつるか
此をみかへしの歌のありた朝臣の嵯峨野をうち過て
くらぶ山までもとめありきけんもあぢきあし又やまと
ことにいひにくき事をこそ添て

我妹子が女郎花てふわたら名を玉の緒にやの結びうつべき

萩 兵部 君

さをまかのすだく麓の下萩の露けきことのかたくもある哉

橘のもちきの朝臣

萩の葉におく白露のたまりせが花のかたみの思のざらまし
此萩の歌の誰もくおちさまあれどすだく麓のまど
いへるわたりすこしいひあれたりもちきの朝臣の萩の
葉におくまら露をといへるわたりめづらしからねと歌
めいたり

あかくも明に
もの意なり

しらに知らず
にまらにのなを
かくしたる也

正しかられは
下類本たしかな
らねばにやあら
んありま知る人
少なしまた上に
花もみいで下に
句ふさいふにつ
けてごあり

なけれも下の
一本ちん所少な
くなけれもさ
あれご意義解し
つたし
今一文字云々ハ
秋をまらにて
ハ文字の敷たら
ねはま文字を加
へさてしらにを
隠しいたるを
ほめいへる也

露を浅み下葉も未もみぢねばわかとも見えず勝まけの程

まらに 辨 君

別れゆく秋をしまらにちく鹿の命をさへやとめかぬらん

もりのふの朝臣

あだし野の草村にのみまじりつる句のいまや人にまられん
此もりのふの朝臣のあだし野の名たしからねば
にやありどころすくさしまたかみに花もみえずまもに
はちも見えで此歌ことなる心のあけれどもそへどころ
すくさきに今一文字をくへてまらにといへる所いま
すこしまされり

覺東あだし野見れば花もあし空に句ふといふ何ぞも

草のから 右衛門 君

どこかの露うちはらふ宵ごとにくさのかうつる我袂かち